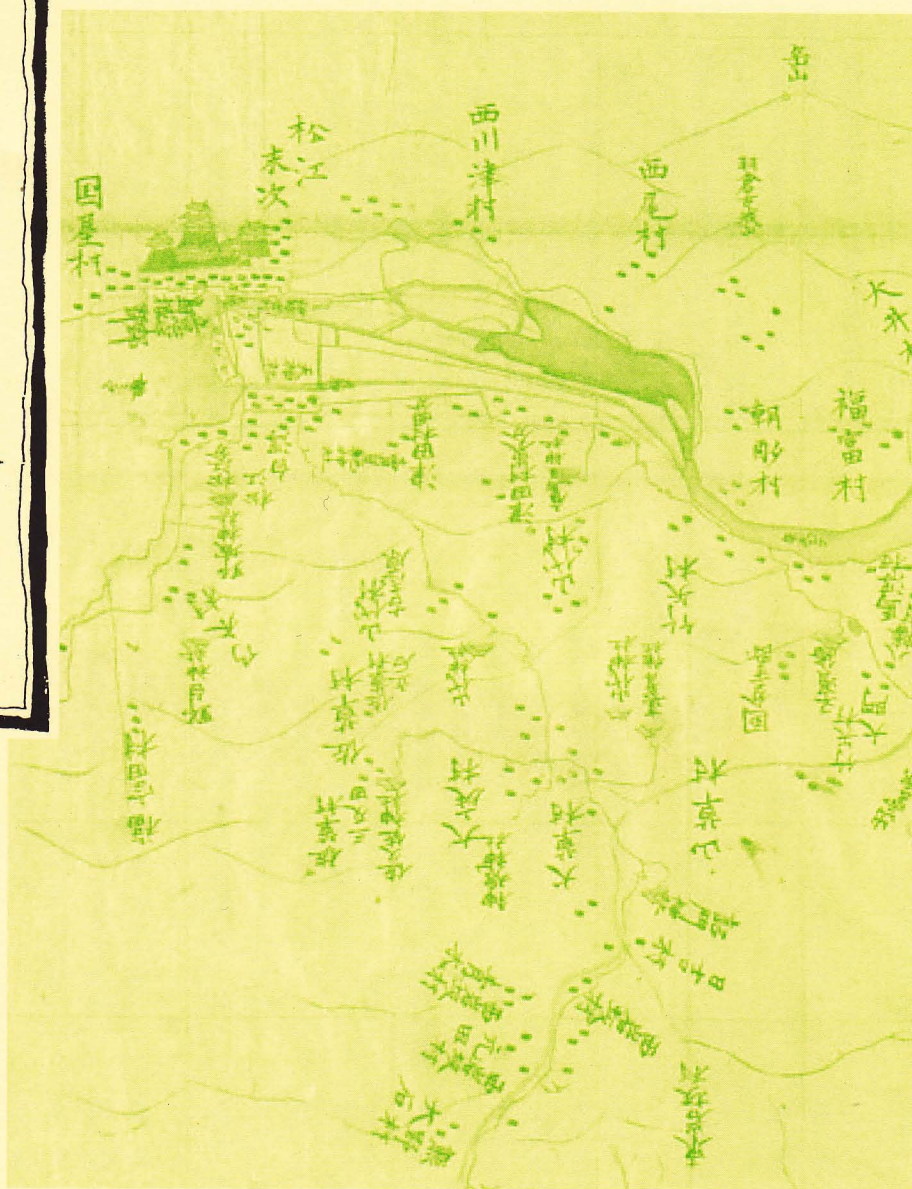


研究

史料と伊能図



二〇〇九年 第五六号

伊能忠敬研究会

伊能大図第155号 松江（部分）

第155号は出雲から伯耆の一部を含む。モノクロ版ではあるが、同じ155号の、関東大震災で焼失する以前の伊能家控図の実像を伝える写真図版が、『歴史地理』十三巻一号（一九〇九）に掲載されている（本誌第三八号参照）。両者を比べると本図の模写は測線・地名とも至って精確といえるが、松江城の「松平出羽守居城」という注記だけは欠落している。

この一帯は文化三年（一八〇六）六月、八月と文化十年閏十一月の二回にわたり測量された。松江城左下に見える宍道湖と、図の右枠外に広がる中海を結ぶ大橋川の北側が先で、川の南側は文化十年の九州第二次測量帰途の測量である。文化三年には忠敬は体調を損ね、隊の隠岐測量の間、松江で療養にあたった。

末次は旧称、また大橋北の松江城一帯の呼称で、対する南岸一帯を白潟とする。城の東方には網目状の水路が描かれ、広い水面もあるが、ここは今では中州で水田がひろがっている。

南方、山代村から熊野村にかけて多くの神社に測線が延びる。右端に国分寺跡があるが、現在は真名井神社を正面に見る川沿いに国府跡も発見されている。風土記の丘の一帯である。真名井神社隣の山代神社は茶臼山の中腹にある元の宮で、いま一つ、測線沿いに記された同名の位置に、延宝年間に遷宮された。旧跡については日記に「遠測」とある。南端に熊野神社下宮がある。地図にもあるように火出初神社ともいい、古来出雲国の大社として杵築大社（出雲大社）と並び称される。毎年十月一五日の鑽火祭は神聖な火を鑽り出す「燧臼」「燧杵」を熊野大社から出雲大社の宮司に授ける神事である。神代からのこの地域の背景を間然なく当枠内に収めるのは至難、舌不足陳謝。

鈴木純子（題字は伊能忠敬の筆跡）

目次

56号

巻頭

史跡探訪6「伊能忠敬絶讃之地碑」

野田 茂生

一

話題I

「樂天樓」の野紙と版本

編集部

二

完全復元伊能図全国巡回フロア展

編集部

四

「伊能中国の写し」を臼杵市で確認

編集部

七

「忠敬祭」・「測量の日」フロア展

編集部

八

話題II

伊能大図総覧の地名と景観（十）

星埜 由尚

九

「伊能忠敬絶讃之地碑」碑文について

野田 茂生

一九

日食と伊能忠敬

編集部

三六

芳名録

飯田吉英 亘理章三郎

伊能 陽子

二〇

研究ノート

伊能忠敬に学ぶ 小中高生の社会科学学習

佐久間達夫

二二

伊能忠敬研究（六）川崎まで歩く！その二

石谷 春香

二八

柏木家文書（二）

柏木 隆雄

三七

「和算の人脈」補遺

安藤由紀子

四六

伊能忠敬の測量之碑第一号

佐久間達夫

五四

大谷亮吉と『伊能忠敬』

橋本 万平

六〇

九州支部だより

名護屋城博物館で学ぶ

馬場 良平

六四

忠敬談話室

例会案内 会員情報

編集部

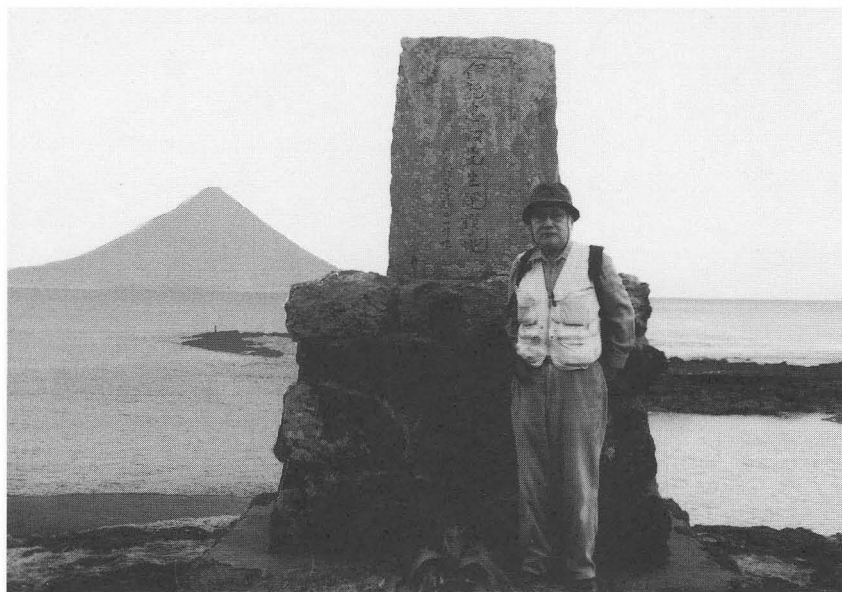
六九

お便りから日々の話題 お知らせ

編集部

七〇

表紙図解説 鈴木純子



伊能忠敬は第七次測量の途中、文化7年（1810）この地を訪れた際、この海岸から開聞岳（薩摩富士）を一望し、「けだし天下の絶景かな」と賞讃したと伝えられる。番所鼻は薩摩半島南端の太平洋や開聞岳を望む海岸にあり、藩政時代は密貿易取締の遠見番所が置かれたのが名前の由来である。好天の日は屋久島、種子島なども遠望される。

史跡探訪6 「伊能忠敬先生絶讃の地」記念碑

◇所在地 鹿児島県南九州市顚娃町別府 番所鼻公園内 ◇設立者 顚娃町別府区観光委員会 ◇揮毫 内閣総理大臣（当時） 鳩山一郎
◇設立年月日 昭和三十一年二月 ◇設立経緯 伊能忠敬がこの地で「けだし天下の絶景なり」と賞讃したことを記念し石碑を建立した。

「忠敬先生絶讃の地」で忠敬先生を絶讃する

案内人

福岡県大野城市在住 野田茂生

「伊能忠敬」を知ったのは、戦時中、兄の修身の教科書を読んだ時に遡ります。しかし、その業績の偉大さに触れたのは、昭和六三年（一九八八）に腰の手術後、千葉の九十九里浜で療養し、佐原の「伊能記念館」に立ち寄った時です。当時、伊能旧宅の屋敷内にあった木造の記念館で伊能図を見た時の感動は、今もはっきり覚えています。

それから十年、定年退職して九州に戻った頃、新聞で石川九州支部長の「伊能忠敬研究会」への勧誘記事を見つけ、早速入会しました。

ところで、「伊能忠敬先生絶讃の地」の記念碑については、江戸時代後期に薩摩藩が編纂した『三国（薩摩・大隅・日向）名勝絵図』に「（中略）往歳大府の測量官、伊能氏、諸国を巡歴して、此地を過ぎし時、景勝を賞して曰く、是名所の浦なり、列国の内にかくの如くなる景勝の処は、復得べからずとて、半日許り駐滞して、この所の書画を写せしとかや（中略）」とあります。これが石碑の由来と思われます。

因みに、忠敬の『測量日記』には、「同（七月）十五日、朝晴曇。（中略）此坊津岬は九州一の絶景と云い伝う。八景あり、（中略）眺望するに九州一ともいい難し」とあります。番所鼻付近を測量したのは七月十三日なので期日・場所とも若干異なりますが（ともに薩摩半島の南端）、この時期の『測量日記』には、他に風景の描写は見当たりません。

ともかく今回現地を訪ねてみて、確かに風光明媚な処には違いありません。特に開聞岳から朝日が昇る黎明の番所鼻は、素晴らしい。皆さんにもお褒めしたいと思います。（のだ しげお・元NHK勤務）

【一九頁『伊能忠敬先生絶讃の地』碑文について】もお読みください。】

「樂天樓」の罫紙と版木



「樂天樓」罫紙の版木

伊能忠敬記念館蔵

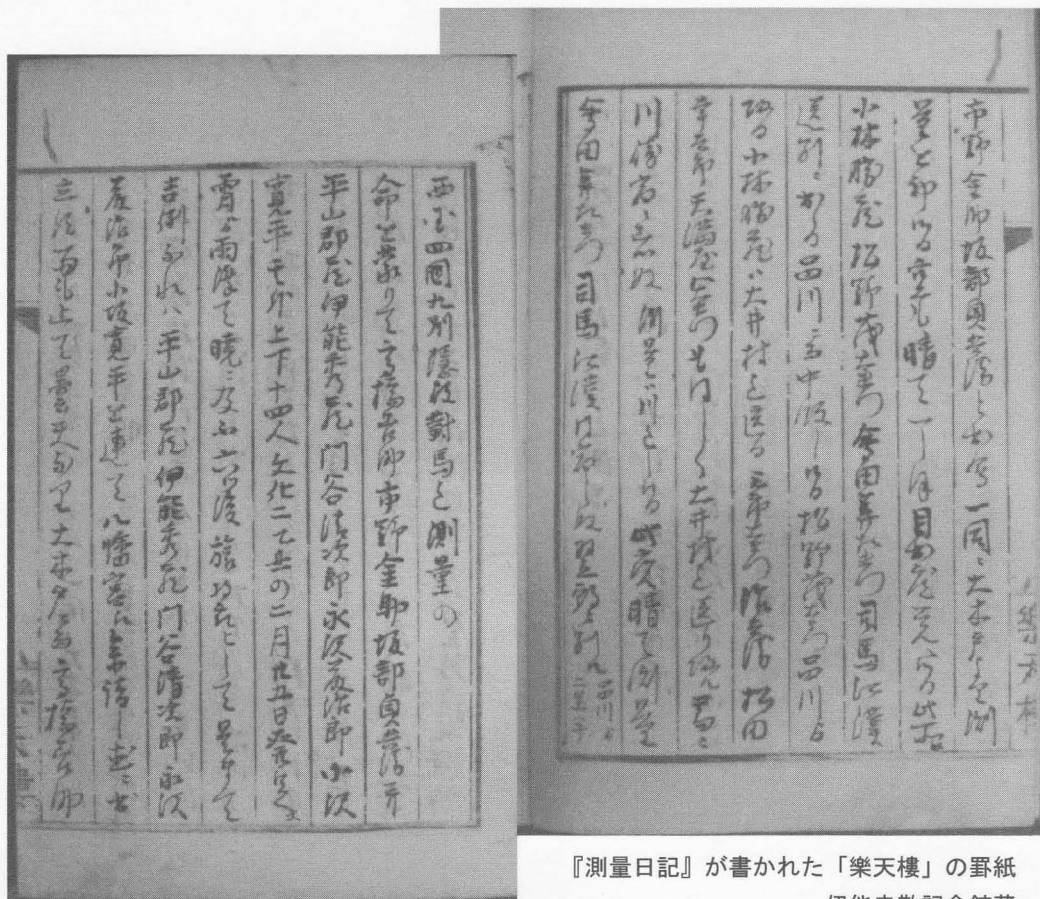
「翁、諱は忠敬、字は子齊、初め名は詮興、東河と号す。姓は伊能氏、通称三郎右衛門、隠居して勘解由と更め、栖を樂天樓と呼ぶ。」(渋川景佑述・撰『伊能翁言行録』より)

右の他にも「三治郎」「佐忠太」「源六」など、多くの名前を持つていた忠敬先生の、「樂天樓主人」は雅号の一つである。

現在残っている『測量日記』は、折り目の部分に「樂天樓」の名が入った罫紙に書かれており、その版木も保存されている。

忠敬先生がいつから「樂天樓主人」を称するようになったかは定かではないが、「天を楽しむ高樓」という名から、黒江町の隠宅に私設天文台を作った時期ではないかと推測される。その天文台は映画や舞台では物干し台のような簡易なものだったが、実際には資財を惜しみなくつぎこんで高価な観測機器を据え付け、「官府の暦局に設置せる諸器に比すとも・著しき遜色無かりしなり」(大谷亮吉『伊能忠敬』)というほどの設備であったから、それに相応しい建物であつたろうと想像される。先生はこの自慢の「樂天樓」で日夜観測に励み、あまりの熱心さと根気の良さに感じ入った師の高橋至時から「推歩先生」の愛称を奉られた。

忠敬には「測量出立の朝、わらじが切れても、酒造桶が破裂しても、燕の巣が落ちてきても、意に介さず笑つて出かけて行つた」という逸話が伝えられている。これは従来、忠敬の科学的精神を表すものとされてきたが、それもさることながら、物事を前向きにとらえる樂觀的性格をも表しているとも考えられる。「樂天樓」という号は「天文を楽しむ」という意味と、「樂天的な人物」を自称する意味をかけていたのではないか。また、測量先で詩歌を所望するなど文人の一面も併せ持つていた忠敬先生のこと、あるいは「白居易(樂天)」を意識しての命名だったかもしれない。



『測量日記』が書かれた「楽天楼」の罫紙
伊能忠敬記念館蔵

版木の「楽天楼」と彫られた部分



罫紙「楽天楼」の左半分



罫紙「楽天楼」の右半分



忠敬ゆかりの地・深川から出立

四月九日（木）の十五時からオーブニング・セレモニーが行われ、一〇日（金）は地元の子供たちを対象とした内覧会と伊能忠敬研究会の内覧会が行われた。つづく土・日曜日は一般公開され、十一日（土）は約二千人、十二日（日）は約四千人の入場者で終日賑わった。この「完全復元・伊能図全国巡回フロア展」は六月二日から開港百五十周年を記念し横浜でも実施された。このあと全国を巡回して開催される予定である。



完全復元伊能図全国巡回
フロア展ポスター

内覧会

一〇日は地元・越中島小学校六年生がフロア展を参観。ほど近い黒江町（現・門前仲町一丁目）に住んでいた忠敬が作った地図を実体験した。

一般公開

最終日の十二日はNHKがニュースで報道したこともあり、家族連れなど多

くの人々が来場して大盛況となった。来場者が会場にはいりきれないため入場制限を行ったが、それでも人が多すぎて床の地図が見えなくなるほど。思い思いに郷里などの地名を探す姿が見られ、午

後五時の終了時間まで賑わった。



大図の江戸付近に見入る人々



会場こぼれ話

お世話になりました！

伊能陽子

大勢の人が溢れる深川スポーツセンターの会場、日本地図の真ん中に座り込んで「井関村」を探していらっしやったのが古西（こにし）チエコさん九〇歳。昨夜、NHKテレビのニュースをご覧になったご子息夫妻がお連れくださったとのことでした。

古西さんは、会報五四号巻頭で松井義典さんが紹介された史跡探訪神石高原町の「伊能忠敬測量隊宿邸跡碑」の一つ、下井関年寄門田久治良翁邸（寄貞屋敷）の門田（もんでん）さんのご子孫でした。伊能「その節はお世話になったことでしょうか」

古西「どんなおもてなしが出来たのでしょうか」
なんとも楽しい会話が弾みました。

それぞれの先祖様、どこかで笑っておられたでしょうか。

神石高原町の「伊能忠敬測量隊宿邸跡碑」の碑文の「寄定」は「寄貞」、
「久治良」は「久治朗」と伝えられているそうです。

☆ご縁とはふしぎなもの。古西家は呉市阿賀のご出身で、例の「夜中測量之図」の持ち主である宮尾さんにご近所だったそうです。



文化8年（1811）2月14日宿泊のお礼

マスコミ報道から

パネルが三月下旬に京都府立体育館で報道陣に公開されて以来、フ
ロア展はマスコミに数多く取り上げられた。その一部を紹介する。

【3月28日】「忠敬の業績 大きいぞ」朝日新聞、『伊能大図』複元

産経新聞、「伊能忠敬の日本 歩いて実感」読売新聞、「伊能図」克明に再現」京都新聞、「雑記帳」毎日新聞、「窓」日本経済新聞、「伊能忠敬の『足跡』複製 日本全国並べ公開」asahi.com

【4月9〜12日】NHKニュース、「伊能図：デジタル

復元が完成、全国巡回へ」毎日、「伊能忠敬の日本地図復元 東西47×南北45メートル」朝日、「伊能忠敬の巨大地図完成3年かけて全国を巡回」やきがけ on The Web、【5月9日】「伊能忠敬の苦勞 体感」読売新聞夕刊 ※右の他、江東区のホームページ等にも掲載された。

伊能忠敬の苦勞 体感

江戸時代の諸藩家、伊能忠
敦が作った日本地図が度々江
事。4月1日、12日、東京・江
事区の森川スズミツセンター
で公開されました。「完全版
元伊能忠純全国図説」の「序」
と題し、由緒を藩所に準とし
た縮尺は3万6000分の1
の1幅(縦)21分60秒
00分の1、横(中)8分43
万2000分の1、小図8分
加工すべて手えられ表面
加工を備へ、上を歩けるよう

「完全版」

復元地圖
全國巡回

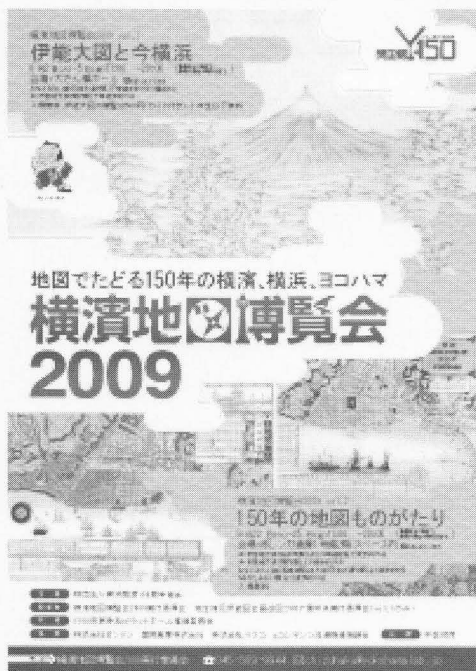
日本全國を歩いて測量、初めて
の地圖に日本國を地圖に定
成させました。順治帝は後、
殺府が臨本を経過して、東上
した。失事で機失、子孫が持
たない様子を、機失を子孫に
製させました。機失は機失を
90年代、國內や々々地方な
く、と多く、至是され、帝國の完



「横浜・開港百五十周年」フロア展

横浜開港一五〇周年記念の一環として、横浜の歴史や生活文化に深くかかわってきたさまざまな地図を展示する「横濱地図博覧会 vol.1『伊能大図と今横浜』」が開港記念日の六月二日から五日まで大さん橋ホール（横浜市中区海岸通）で開催され、約二、三〇〇人が訪れた。

「伊能忠敬 体感ゾーン」では、三五×六五メートルの巨大なフロアマップ「完全復元伊能大図」が展示され、参観者がその上を歩きながら関心のある地名を探していた。参観者は現代の地図に比べても見劣りしない伊能図の正確さを体験し楽しむとともに、伊能忠敬研究会員の解説を聞いて伊能図への理解を深めていた。このほか横浜中心部が描かれた巨大フロアマップ（二五〇〇分の一）も配置され、またウオーキングと地図作りをテーマに、現代の地図が一堂に展示された。



横浜地図博覧会 2009 のポスター

「伊能中国の写し」を臼杵市で確認 ——大分県で初、部分的な写しは希少——



臼杵藩領に着色「臼杵沿岸実測図」

臼杵市教育委員会には多数の近世絵図及び関連資料が所蔵されているが、そのうちの「臼杵沿岸実測図」＝県指定有形文化財Ⅱが「伊能中国」の一部を写して着色した珍しいものであることが二十一日までに確認された。

市教委によると、県内で伊能図の写が確認されたのは初めてで、全国的にも図の一部を写したものはほとんど確認されていないという。報道の内容は次の通りである。

臼杵沿岸実測図は、現在の市立東中学校グラウンド付近にあった台場の設計図「洲崎台場設計図」＝県有形文化財「近世絵図資料群」Ⅱと一括で残っていた。縦二八cm、横四〇・三cmの和紙にカラー原寸大で、臼杵、津久見両湾沿岸の臼杵藩領に当たる部分だけを写している。

調査をした伊能忠敬記念館（千葉県）の紺野浩幸学芸員は「オリジナルの伊能図にはない、藩領の色分けがあるのが珍しい」と評価。「伊能図がどのように広がり、使われていたのかを研究する上で貴重な資料」としている。

伊能図など日本の古地図資料を調査してきた元文化庁主任調査官で国立民族学博物館の佐々木利和教授も「図の記載内容、筆致などから、伊能図の写しで間違いないだろう」とコメント。その上で、伊能図を写す際によく用いられた、針穴を開けて写す針突（しんとつ）法の痕跡がないことから「どんな技法で、どのようなきつかけで写されたのかをさらに調べる必要がある」と指摘している。【平成二十二年三月二三日 写真とも 大分合同新聞】

佐原・観福寺で「忠敬祭」肅々と

平成二十一年五月十七日の日曜日、伊能忠敬の命日の法要である「忠敬祭」が伊能家菩提寺である香取市佐原の観福寺で行われた。例年墓前祭として行われる「忠敬祭」であるが、この日はあいにくの雨天のため本堂を会場としてしめやかに執り行われ、本研究会からは佐原支部の成家淑子氏が参加した。

伊能忠敬は一九〇年前の文政元年（一八一八）四月十三日に没した。命日である四月十三日を新暦に読み替えて、例年五月十七日に「忠敬祭」が挙行されている。

忠敬没後一九一年目の今年は、ガリレオの天体観測から四百年、

間宮林蔵の間宮海峡発見から二百年目にあたる。世界の歴史のなかで忠敬先生の業績をとらえ直してみたい年である。



（写真・伊能忠敬記念館提供）

本堂で執り行われた今年の忠敬祭

今年も各地で「伊能大図」フロア展開催

国土地理院「測量の日」関連イベント

六月三日の「測量の日」

（国土交通省・主唱）にちなみ、今年も東京・新宿で「くらしと測量・地図展」が新宿駅西口イベントコーナーで開催された。

例年のように伊能大図のフロア展を中心に、測量関係資料の解説パネルや当時の測量機器の展示が行われた。

この「測量の日」関連イベントとして、今年の秋には北海道の稚内で「2009 間宮海峡発見200年記念 伊能大図フロア展 in わっかない」が、同じく土別では「測量の日記念事業・土別市開拓110周年記念事業 伊能忠敬大図2009フロア展 in しべつ」が開催される。



新宿駅西口のフロア展

◇2009 間宮海峡発見 200 年記念 伊能忠敬大図フロア展 in わっかない

*10月9日～10月12日

*稚内総合文化センター

◇測量の日記念事業・土別市開拓 110 周年記念事業 伊能忠敬大図 2009 フロア展 in しべつ

*10月30日～11月3日

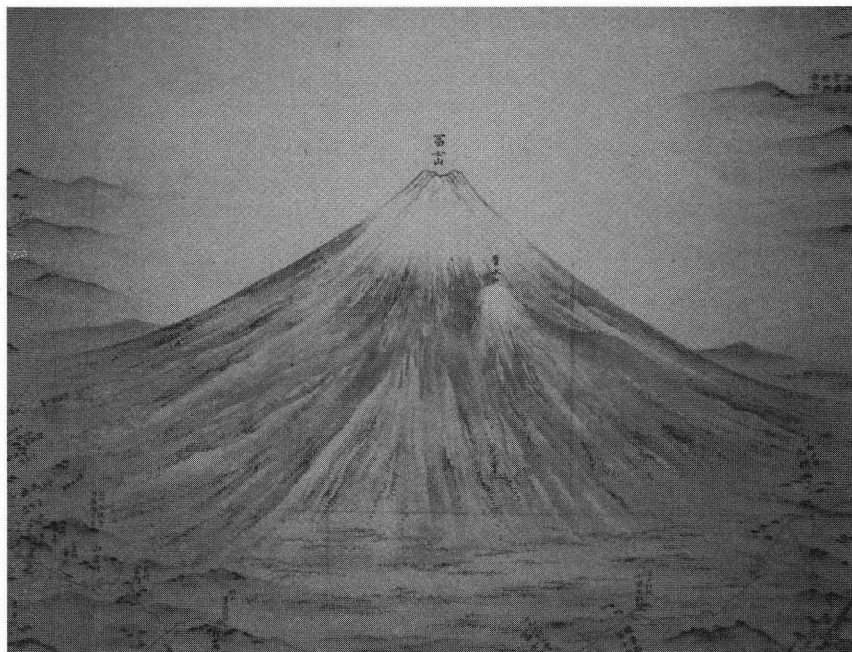
*土別市生涯学習情報センター

問合せ先：北海道地方測量部

TEL 011-709-2311

伊能大図総覧の地名と景観(十)

星 埜 由 尚



第1図 富士山

富士山

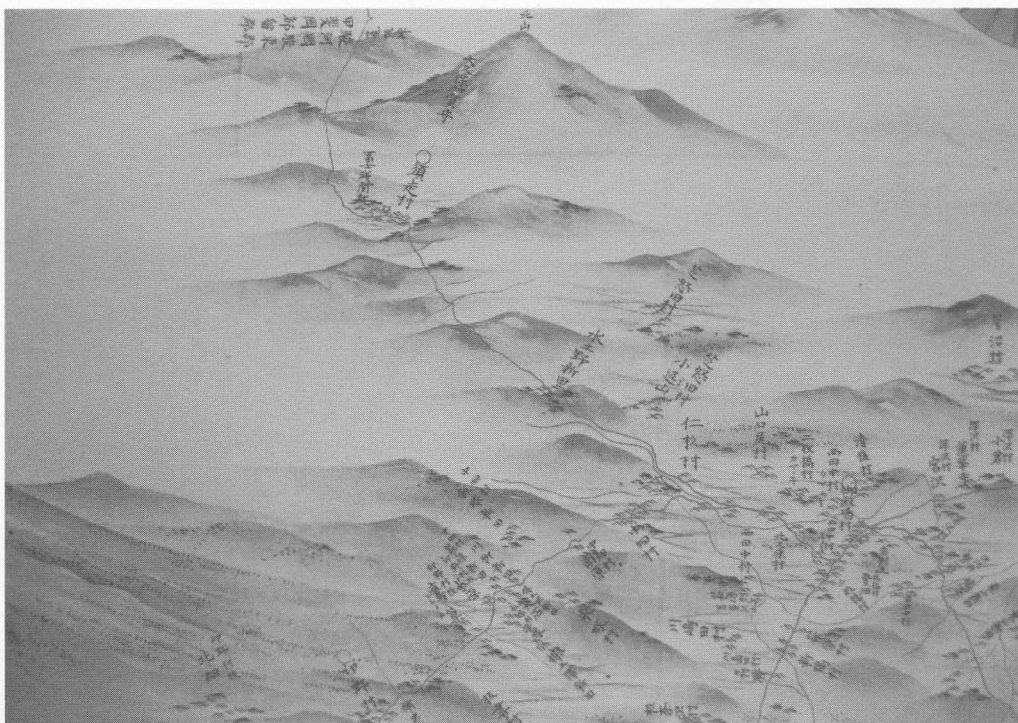
富士山の周りはかなり密度高く測量しており、測線も特に南側には多数走っている。改めて述べるまでもないが、第1図は、富士山を描いた図である。富士山は、各地からその方位を測量されている。大図には、その方位線は描かれていないが、中図、小図には、多数の方位線が引かれている。このように、富士山の頂上は、交会法によりその位置が大図上に正しく示されているが、富士山のかたちは、現代の地図のように等高線などにより地形を表現することがなかったため、富士山を南側から見た形で描いたスケッチである。富士山の頂上は白く雪を被ったようであり、中腹以下は、青緑色に美しく彩色され、きわめて優美な富士山に描かれている。宝永年間の噴火による火口である宝永山も描かれている。

富士山の周囲を見ていくこととしたい。

御殿場

文化八年(一八一二)に開始した第八次測量において、伊能測量隊は、一月二五日に江戸を出発して小田原に向かい、関本から御殿場に向かった。御殿場は十二月四日に通過し、須走を通り、甲斐国に入り吉田に向かっている。

第八次測量の測量日記には、「右の方に東照宮御茶屋跡あり・・(中略)・・此辺より須走村辺宝永年中富士山焼に田畑悉亡地と成る」とあり、東照宮御茶屋跡とは徳川家康が休息するための御殿の跡の意であり、家康が実際に使ったことはないが、御殿場の地名の起りりとされている。宝永年間(一七〇七)の富士山の噴火の際には、この周辺は降灰により大きな被害を被った。第2図を見ると、箱根から二本の測



第2図 御殿場

線が御殿場村で合流するが、このあたりから二枚橋村のあたりまで集落が続き、二枚橋村から須走へ向けて測線が分岐している。現在の地形図を見ると、御殿場市街の中心は伊能測量当時の御殿場村とは異なり、二枚橋村、新橋村のあたりが現在の市街地となっている。明治時代になってから鉄道が敷かれ。駅ができたことからかつての御殿場村から新橋村のあたりに中心が移ったのであろう。市街から外れた北の方に御殿場の地名が地形図にも記されている。御殿場村には、「宝樹院」と記入された寺があるが、これは、「宝持院」の誤りである。アメリカ大図には、宝持院と書かれている。

須走村では、天測を行い、富士山の高さを測っている。富士浅間社が描かれ、短い測線が分岐して延びている。測量日記によれば、大宮(富士宮)の駿州一ノ宮は社領千石と記されているが、須走の浅間社は御朱印なしとの記述がある。

第九次測量では、三島から御殿場までの測線と乙女峠を通り箱根へ抜ける測線、富士の裾野の測線を測量した。第4図は、大図第100号の南東端に当たる部分であるが、文化一三年正月二九日、三島から測量を進め、駿河に入り、平松新田座頭塚という地名が見える。測量日記には、已前努一という盲人の為に千人の座頭が供養の塚を築いたことに由来すると書かれている。青色ではつきりと川筋が描かれているが、河川名は記されていない。これは、木瀬川(黄瀬川)とその支流である。佐野村には宿泊しているが、人家一一〇軒と記されている。木瀬川の右岸には、定輪寺という寺が描かれている。御朱印五石五斗、門前に人家六軒ありと日記には記されている。この寺は、弘法大師空海が開いたと言われ、室町時代の連歌師宗祇の墓がある。佐野村には大きな甍が二つ描かれているが、日記には「浄土宗法雲寺というあり」と記され、この甍のどちらかであろう。



第3図 彩色地形図 「御殿場」

佐野村から、富士の裾野を進み、須山村まで測り、佐野村に戻っている。その後、御殿場村を経由して富士と愛鷹山のあいだの裾野を大宮（富士宮）へと測量した。測量日記を読むと、須山村は他国のものの呼び方であり、現在は深山村と呼ばれていると書かれており、かつては須山村と呼ばれていたと述べている。深山村と呼ばれるようになったのは、五〇年前に書き誤ったものだそうである。領主には、深山村と報告していると言っている。真相は定かではないが、面白い話である。大図には、「深山村旧名須山村」と記載されている。深山村には、富士浅間社があり、神主・渡江対馬正のほか御師十二人と日記に記され、字の集落を含め、人家一一軒とされている。富士登山口として賑わっていたのであろう。現名は、須山である。

測線は、御殿場から大宮にいたる測線に繋がれ、深山より先は、一面の草原となっていることが日記には記されている。見通しがよいため、周囲の山の遠測を行ったと書いている。大図を見ると、緑色の草原状の表現が見られる。また、深山村のあたりから上流は、河川が青色でなく黄色に彩色されている。これは、測量日記にも水無川であることが記されており、火山特有の透水性の河川で涸れ川であることを示している。ここから富士山の登山道が開けるが、深山村の先の測線の交点から、約一里で馬返しとなりその先一里が一合目で、そこまでは木が生えているが、その先は砂山であると書いている。夏には六月から七月二六日頃まで五合目に茶店が出て登山者を泊めること、深山村では強力を頼めることが書かれている。

深山村からさらに北に進み、御殿場から愛鷹山と富士山の間を通過する測線と交わっている。富士山と愛鷹山の間にある十里木新田は、深山村の枝村で、日記には、「此村富士愛鷹山の間狭く実に孤村の茅屋也」とあり、富士の裾野の原の中にある寂しい開拓集落であった。

第 4 図 愛鷹山



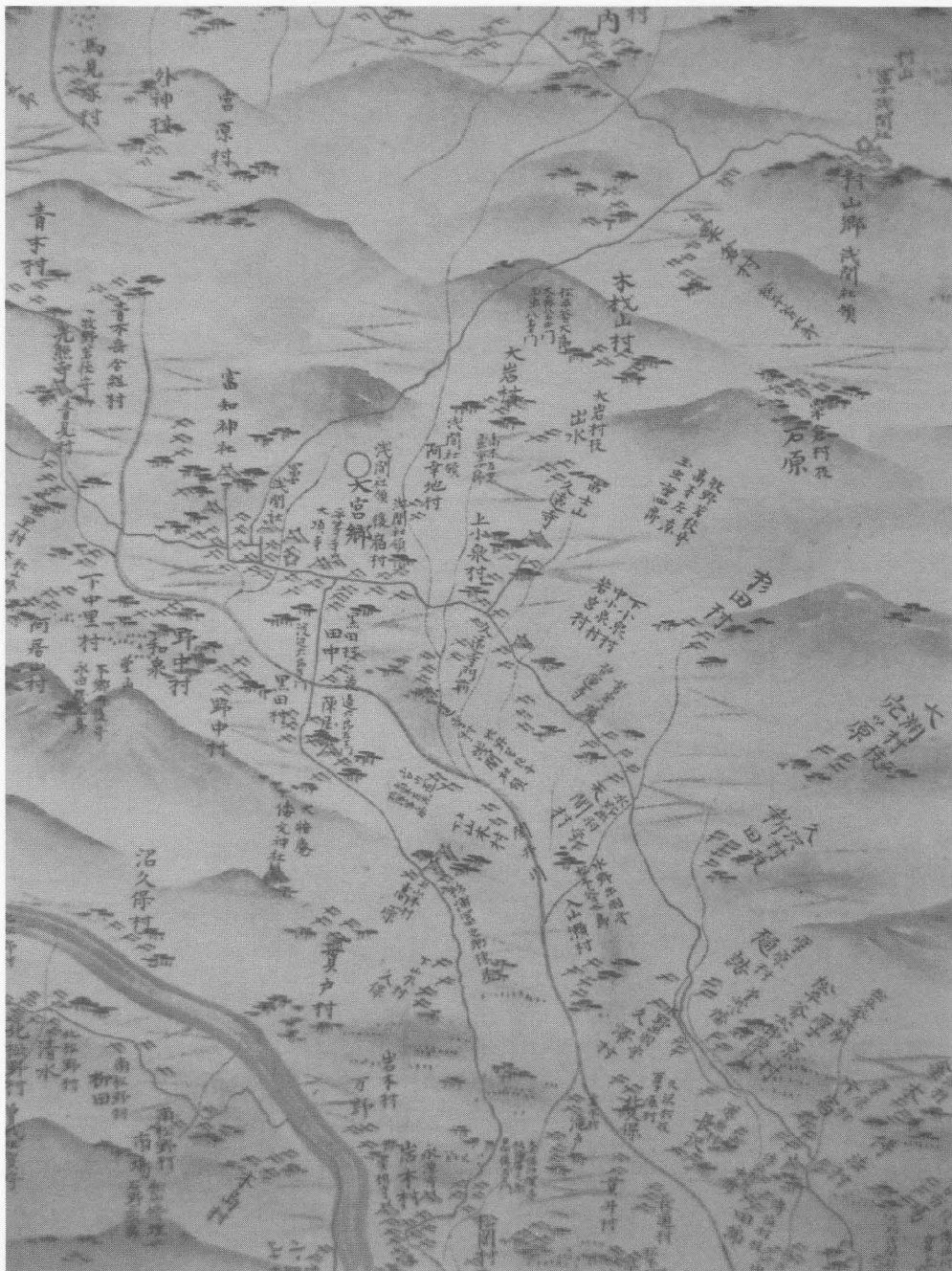
富士宮

現在の富士宮即ち大宮郷は、多数の測線が集まり、家並みも多く、富士浅間社の門前として賑わっていたのであろう。富士宮周辺は、第九次測量である。従って、伊能忠敬は参加せず、天文方下役と忠敬門弟により行われた。このときの測量は、御殿場方面から十里木を通って吉原に抜け、吉原から大宮郷、村山郷、人穴など富士の西側を隈無く測量している。

ここでは、寺社の記載が多い。大宮郷の駿河一の宮富士浅間社をはじめ、村山郷の富士浅間社、本宮の末社富知神社、富士山大石寺、富士山本門寺、富士山久遠寺、富士山妙蓮寺、富士山東泉院など多数の寺社が描かれている。これらの寺社や人穴にはすべて測線が延びているが、なぜこれらの寺社にわざわざその社前や門前まで測線を延ばし、わざわざ立ち寄っているのだろうか。村山郷の浅間社は、日記にもでているように富士登山道の途中でもあった。人家は六軒散在していると日記には書かれている。ここでは宿泊し、天測を行っている。

大宮郷、深山村、須走村、上吉田村、村山郷に富士浅間社の注記があり、その他、今宮浅間社、六所浅間社などが大図第100号には記載されている。富士山と頭書された寺院は、富士山東泉院は別として、西山と北山と二つの本門寺があり、他の寺院と併せて富士五山と言われている。いずれも日蓮の高弟日興を開祖とする日蓮宗系の寺院である。

二月十一日村山郷に宿泊した測量隊は、北山富士山本門寺へ向かった。本門寺は、御朱印五十石多数の坊があり、そのうちの一つに宿泊した。大図を見ると塔が描かれており、五重塔である。五重塔は焼失



第5図 富士宮



第6図 富士五山

して現存していない。西山本門寺は、人穴、白糸滝を廻った後、二月一九日に立ち寄って大宮に戻っている。御朱印高二十一石六斗、境内諸堂十一ヶ所、坊中十六ヶ寺と測量日記には記されている。

西山本門寺の前には、二月一六日上条村の富士山大石寺寂日坊に宿泊した。大石寺は坊中三十六ヶ寺、御朱印六十六石余境内南北千三百六十間(約二・五km、東西五百十四間(約一km))と測量日記に記され、今川以来の朱印目録があることも記されている。大石寺からすぐ妙蓮寺である。妙蓮寺の辺りは、南条氏の古城跡で、大図にも上野南条兵エ七良次郎墓と注記のある墓石様の絵が小さく描かれている。南条七郎次郎とは平時光^{*}と言ひ、北山本門寺の三堂建立の棟札(永仁六年(二二九八))に大施主として名前の載っている人物である。あと一つの五山久遠寺は、二月十日吉原宿から大宮郷へ向かう途中で立ち寄っている。御朱印高四〇石、「建武元年戊午開基坊中九院境内廻り二七町十八間」と測量日記には記される。二十七町十八間は、三kmほどであるからかなり広い。

富士山東泉院は、今宮浅間社の別当寺で、測量日記には「攝州醍醐山報恩院末古義真言宗富士山東泉院弘法寺」と記され、御朱印高一九〇石余とされ、日蓮宗とは関係がないが、大きな寺院のようである。

伊能測量隊は、神社仏閣には立ち寄ることが多く、他の地方でも社前門前まで測線が分岐して描かれていることが多い。これは私の想像だが、伊能忠敬はじめ測量隊のメンバーは信心厚く、名所旧跡見学の意味合いもあったことと思われるが、そもそも寺社は、幕藩体制の下での行政上重要な公共施設であつたのではなからうか。キリシタン対

^{*}1平(南条)時光(1259~1332)は、駿河国上野郷の地頭で上野殿と呼ばれた。日蓮に深く帰依し、妻妙蓮のために自邸を妙蓮寺とした。



第7図 彩色地形図 「富士宮」「上井出」



第9図 彩色地形図 「上井出」

策、檀家氏子と言った住民掌握制度は、幕府や諸藩の重要行政課題であり、そのため、伊能測量においても寺社の記載が求められたのではないかと思う。測量日記には、寺社の朱印高などが記載されており、西日本ほど詳しい傾向が見られる。伊能忠敬の全国測量の前半は、海岸線の形をとらえることを期待されていただろうが、後半は、それに加え、このような公共施設の所在にも関心が向いていたのではないかと思うのである。

人穴・白糸の滝

文化一三年二月一日村山郷に宿泊し、村山浅間神社まで測量して天測を行った後、上井出宿でも天測し、人穴に向かっている。人穴は、富士溶岩が作った洞窟で、富士山信仰の修行場であった。人穴村は、伊豆韮山代官江川太郎左右衛門の支配所で年貢が免除されていた。水の乏しいところで、夏の雪解け水を汲み、秋から天水を貯めること、周辺には茶畑が多いことが測量日記には記されている。上井出宿から人穴村まで、七里の間人家がなく、間遠之原と呼ばれている。

人穴村から猪頭村を廻り内野村から白糸滝を見て上井出宿からの測線につないでいる。猪頭村から一里ばかり山裾で川海苔が採れ、「富士海苔」、「芝田海苔」とも言われることが測量日記に記されている。この周辺の川は、火山麓の河川の特徴である涸れ川となっていたようで、黄色の線で描かれている川が多い。そのなかで猪頭村の西を流れる川は水色の線で描かれており、西側の山地から流れる清流で、川海苔も採れたのであろう。測量日記には、人穴村から猪頭村の周辺は「広野草原也」と記されているが、測線に沿って緑色の点描が描かれ、草原であることを示している。

二月一六日に内野村を出て白糸滝に向かった。白糸の滝は芝川に分

流に懸かる滝であると測量日記には記され、大図もそのような表現になっている。ところが、現在の地形図(第9図)を見ると、滝は、芝川本流に懸かっており、滝の位置が逆になっている。ここでは、芝川は、本流、分流ともに峡谷をなしており、河道が変わったとも思えない。この点は謎である。測量日記によれば、白糸滝は高さが約五間(九m)、巾が約六間(十一m)で、四筋に落ちると記され、兩岸に藤が多く、花の頃には諸国の人が多く集まると記されている。現在の白糸の滝は、高さ二十m、巾二百mと言われており、伊能測量隊の見た白糸滝は、随分と規模が小さかったことになる。これも謎である。

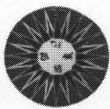
*1 測量日記については、佐久間達夫「伊能忠敬測量日記 九州第

二次測量篇の一」及び「伊能忠敬測量日記七島測量篇」による。

*2 掲載した大図は、すべて国会図書館蔵の大図である。「伊能大図総覧」(河出書房新社)から転載した。

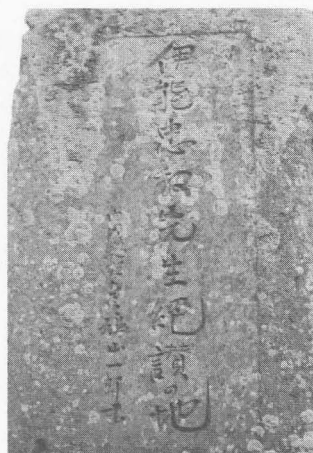
*3 彩色地形図は、(財)日本地図センターのホームページに掲載されているものである。

(ほしの よしひさ・代表理事・(社)日本測量協会副会長)



「伊能忠敬先生絶讃の地」碑文について

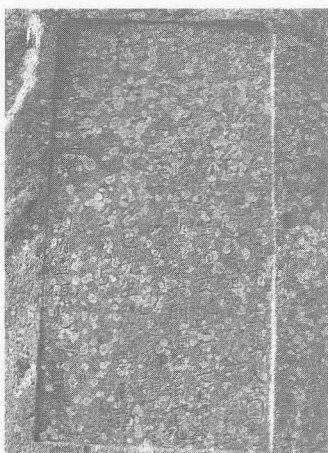
野田茂生



【表面】

伊能忠敬先生絶讃の地

内閣総理大臣 鳩山一郎書



【裏面】

伊能忠敬先生は千葉県佐原市の生れで全国を測量して最初の日本地図を完成した人であるが此の地には今から百六拾年前文化七年七月に来られて此所長手崎（番所）の雄大明媚なる風光に驚嘆し「蓋し天下の絶景なり」と稱讃されたと言う○○である○後世先生の偉業を讃えて此の碑を建てるものである

昭和三十一年二月

別府区観光委員会



山武郡横田
2008.5.15
江口俊子氏画

芳名録より

—佐原伊能家を訪れた人々—

伊能陽子

達観

吉英

飯田吉英

達観

大正十五年八月

飯田吉英

飯田 吉英

いいだ よしふさ（一八七六—一九七五）

茨城県新治郡戸崎村（現かすみがうら市）に生まれる。東京帝国大学を卒業、農商務省（現農林水産省）技師となり、実習生としてイリノイ州立大学へ留学、食肉加工について研鑽を積む。畜産試験場勤務時代に、ソーセイジ職人のドイツ兵（第一次世界大戦捕虜兵）と出会い、日本で初めての本格的なソーセイジ作りを学び成功させた。その他、食肉加工分野で多大な功績を残す。

（茨城新聞ニュース、かすみがうら市H・Pより）

惟神生々

左平孝、八月十九日
両日にわたり先生の遺書
を拝見したる記念として

巨理章三郎

惟神生々

大正十五年八月十九、二十

両日にわたり先生の遺書

を拝見したる記念として

巨理章三郎

巨理 章三郎

わたり しょうざぶろう（一八七三～一九四六）

篠山藩士族の三男として出生。明治、大正から昭和一六年退官まで、当時代の「国民道徳本論」を中心に著書も多く、教育界で活躍した人物。東京高等師範学校教授（大正一四年）、文部省視学委員（大正一五年）。そしてデカンショ節の父？

※明治三十一年の夏、房州館山に、篠山からの遊学生たちを連れ水泳の合宿をした際、たまたま同宿となった旧制一高水泳部の連中とお互いに張り合い、歌による応戦となった。一高は寮歌で、丹波篠山の連中は故郷の盆踊り歌・デカンショ節で対抗し若者同士大いに和んだという。この一高の連中によって全国に広まったのがデカンショ節、巨理先生はこの歌詞の多くを作成したという伝承もある。ちなみに、その時の一高水泳部長は塩谷温、二八号の「芳名録より」で紹介済みである。

（篠山市H・P、フリー百科事典『ウィキペディア』）

今回のお二人、同頁同年月の署名だがお二人の関わりはわからない。ソーセージの父とデカンショ節の父、そして若き日の歌合戦のお相手が、この芳名録に登場なさるとは何とも愉快である。

（いのう ようこ・伊能忠敬研究会顧問）

伊能忠敬に学ぶ

小・中・高校生の社会科学学習

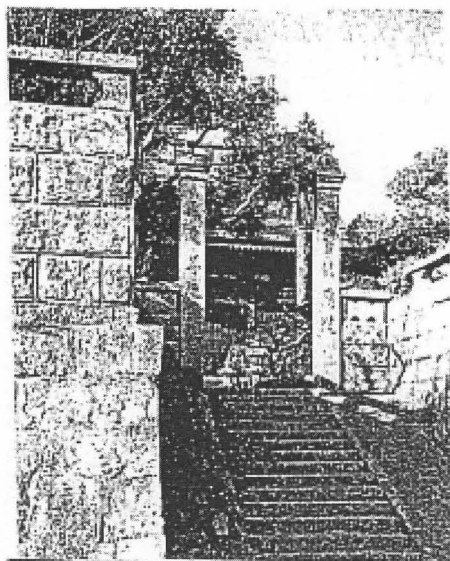
佐久間 達夫

私が、伊能忠敬記念館に勤務して間もない頃、大分県日田郡大山町（現大分県日田市）の都築小学校の六年担任から「私の学区の寺の過去帳に、伊能忠敬測量隊が文化九年六月二十九日に宿泊したという記録があるが、記念館に詳しい文書がありましたら教えてください」と、寺の過去帳の写しと、大山町全図とを同封した手紙が届いた。早速、第八次九州一回目測量の該当部分の「測量日記」を開いてみた。

資料一

大山町三光山伝照寺と過去帳

○伝照寺



○過去帳

三光山傳照寺			
伝照寺過去帳 文化九年 六月二十九日			
御聖大名奉書 小宮山出井等 有田森久等 柳川昌等 出衆則時等 同三百御郡代 稀陳鴻源飛 已未之大室也 已上	五月廿七日 淨玄 谷 長七更珍 寺主	六月九日 淨顔門徒 山之鈞 仁左衛門孫 隱者	七月朔日 兼顔門徒 同 猶治 子 同
大夫町島橋作 足掛門才附 測量方伊能 勘解由同寺 坂部夏兵衛 下條井長門 今泉入兵衛 門金清源郎 已未十九人 御在肥後 弓高郡廻行 甲子九月九日 當寺止面上	八月廿三日 信了 太愚 常門支障 同	九月九日 善秀 同 子助 子 同	十月 妙休門徒 山之鈞 仇子 子 同
	十月 妙意門徒 小子 利七 母 寺主	十月七日 唯了 一井木 要助男鑑 同	十月 淨往 同 音兵衛更 同
	十月 我信門徒 大島 伊兵衛更 隱者	十月 西了目 山之鈞 平八更 同	

・文化九年六月二十八日

出口村（現日田市出口）庄屋七郎右衛門宅着。止宿。

資料二

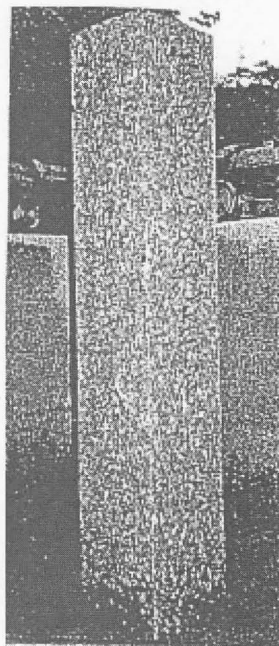
第八次九州二回目測量日記

佐久間達夫校訂。

○伊能測量隊宿泊地
標と都築小の子供



○伊能測量隊宿泊碑



・六月二十九日

曇晴。六ツ後、豊後国日田郡三河口支配御料所、以下村々内に付略。出口村出立。同所より初め、芋作村、新城村、新城・五馬市入会五馬市村、玉来明神社前にて中食。栗林村、続木村 林 印まで測る。二里一町十二間、外止宿打上二町三十六間、合二里三町四十八間、止宿続木村西派一向宗三光山伝照寺九ツ前に着。この夜晴天測る。

・七月朔日

朝より晴、午前より曇。六ツ後、続木村出立。同所 林印より初め、柚野木村、女子畑村、苗代部村、高取村、上井手村、此所にて玖珠川、大山川落合、筑後川に出る。此処にて隈川と号す。玖珠川舟渡、測遠術にて三十八間二尺九寸五分。渡より上井手村、人家中食、庄屋専助。

下井手村溝口、竹田村、河原村、同隈町、田中町、紺屋町、堀田町、元来竹田村内、当時は別に町となる。庄手村、堀田町まで測る。二里十八町二十六間二尺九寸五分。九ツ後に着、止宿庄手村庄屋三十郎、同人忞泰四郎という。（中略）此夜晴天測る。

伊能忠敬測量日記から「大山町」の測量部分を写し取り、都築小学校の六年担任宛に送付した。手紙送付後、一か月程たって、手製の「御用旗」を持って伊能忠敬測量隊の測量した道を歩いたことや、伝照寺の原亮爾住職（当時八十歳）から、測量隊が宿泊したという記述のある過去帳を見せて貰ったことなどを記した児童の作文と写真が送られてきた。

過去帳の欄外に、

天文方高橋作左衛門手附測量方伊能勘解由、同手伝坂部貞兵衛、下

役永井甚右（左）衛門、今泉又兵衛、門谷清治（次）郎、已上上下九人、御差下肥後ヨリ当郡通行、甲六ノ廿九日、当寺止宿已上。

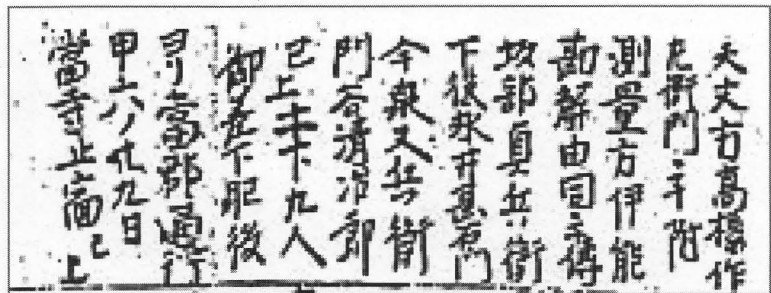
と、記述されていた。

第八次測量は、屋久島、種子島測量の帰路、文化九年六月一日に日向国の麓村（現宮崎県高原町）で二隊に別れて、支隊（坂部貞兵衛、今泉又兵衛、箱田良助、保木敬藏、大山甚七）は本隊とは別のルートを測量し、本隊の伊能勘解由、永井甚左衛門、門谷清次郎、尾形慶助、久保木佐助が、六月二十八日に天瀬町の出口村の庄屋七郎右衛門宅に一泊し、翌日、出口村を出立し、芋作村、五馬市村を経て、続木村の伝照寺に止宿したのである。

したがってこの五人が伝照寺に宿泊したと推察される。

支隊は、麓村から加久藤宿（現宮崎県えびの市）から人吉城下、下松尾村（現宮崎県椎柴村）、内牧宿（現熊本県阿蘇市）を経て、同年七月三日に出口村の七郎右衛門宅で昼休みをして、このルートを通過したのである。

○過去帳の欄外の記述



作文には、「伊能忠敬は日本全国を測量して地図を作ったのだから、すごいひとだなあ」とか、「九州の私たちの町まできて測量したのには、びっくりした」などの感想が書かれていた。

当時、このように全国の小・中・高校生の伊能忠敬についての問い合わせや、伊能忠敬記念館の見学が相当数あった。

次に学校では、どのように「伊能忠敬」の学習をしていたかを知っていたために、香取市内のF小学校の六年担任が実践した社会科学習の「学習指導案」を記してみよう。学習指導案には、学習目標、学習計画、学習内容、学習評価などが記されている。但し、毎日の指導でこのような案を作成するのは大変なことなので、年度当初に指導計画の略案を作成していた。

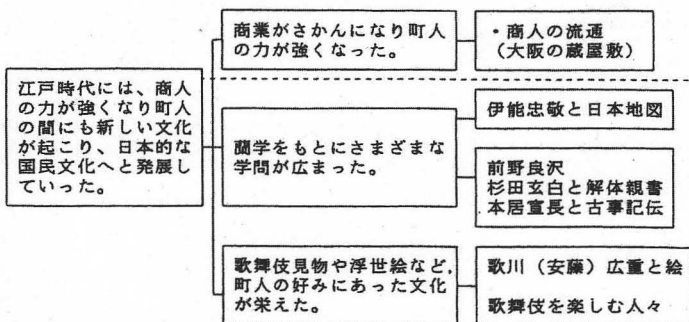
資料三 第六学年社会科学習指導案

単元名 江戸時代の学問（伊能忠敬と日本地図）

一。目標

- ・ 天明の飢饉や利根川の大水から村人を救った伊能忠敬の人となりを理解させる
- ・ 伊能忠敬が日本地図を完成させるまでの功績の偉大さをわからせるとともに、全国測量がいかに難事業であったかをとらえさせる。また、その時代背景と人々の願いとのかかわりで、理解することができる。

○ 教材構造図



二. 学習計画 (六時間扱い)

○ 学習計画

時	過程目標	学習活動と内容	資料
第一次	①忠敬の人となりを理解すると共に、江戸時代の人々のくらしについてとらえられる。	○ 忠敬の人となりと災害に苦しむ人々の生活を調べ、話し合う。 ・天明のききんのとき、苦しむ人々に米・銭を与え、打ち壊しをさせない	佐原村の被害の様子 有力者達の話し合いの様子
2	②忠敬が測量に目を向け学び、それが日本地図 (伊能図) 作成につながったことが分かる。	○ 忠敬らはききんのとき村人を助けた他に、利根川の大水のときも調べ、話し合う。 ・利根川の大水で土手や田畑の修復をする ・測量技術を学ぶために至時の弟子となる ・このことが、後になって地図を作ることにつながる	伊能景利の日記 部分年表 文章資料 忠敬と幕府天文方の至時
第二次	③忠敬がどうして日本地図を作ろうとしたのか、当時の時代的背景と人々の願い等から分かる。	○ 忠敬がどうして日本全図を作ろうとしたのか考え、調べ話し合う。 ・忠敬が日本全図を作ろうと思うまでのできごとを順序よく整理しまとめる	忠敬の行動年表、外国船が来た状況図、読み物資料
4	④地図作りの方法を、伊能記念館の見学によってとらえさせるための学習計画が立てられる。	○ 忠敬は、どんな方法で地図作りをしたのかをとらえさせるために伊能記念館を見学するが、何を聞けばよいか班で話し合う。 ・どんな道具で、どんな方法で行ったのか ・測量しているときの苦労	日本全図 (伊能図)
	⑤伊能記念館の見学を通して、忠敬がどんな方法で日本地図作りをしたのかをとらえさせる。	○ 伊能記念館の見学。 ・グループごとに、見学カードに記入する	館長の話 見学カード
	⑥伊能記念館見学の結果からグループ発表を通してまとめ、忠敬がどんな方法で日本地図作りをしたのか分かる。	○ 伊能記念館の見学後、グループで調べたことの発表会を行う。 ・先生の話しを聞いてまとめる	グループ別の発表資料 物語資料

本時の指導（第3時）

① 目標

○ 伊能忠敬がどうして日本地図をつくろうとしたのか、当時の時代的背景と人々の願い等からとらえさせる。

② 展開

発問	資料	子どもの反応	時配
伊能忠敬は、どうして日本地図をつくろうとしたのだろうか。			20分
1. 忠敬が弟子に入った至時という人は、どんなことをしていた人だったのだろう。 どうして日本地図をつくろうとしたのだろうか調べてみよう。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 文章資料 <ul style="list-style-type: none"> ・ 天文方の仕事と高橋至時 ○ 文章資料（読み物資料）（内容） <ul style="list-style-type: none"> ・ 外国船が日本にきたころの様子。 ・ 幕府は、北方の守りをしなけりばならなかった。（幕府のねがい） ・ そのころ、正確な地図がなかった。 ・ 当時の不正確な地図。（絵図） ・ 幕府は正確な日本地図がほしかった。（幕府のねがい） ・ 至時らの暦学者は、子午線一度の距離を測定する目的があった。（暦学者らのねがい） ・ 日本の正確な地図もできる。 ・ 忠敬も至時に弟子入りし子午線一度の距離を測り正確な地図づくりをしたくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幕府の天文方（暦学・天文・測量学）の人である。（内容的に子どもたちの調べ学習が理解しにくいので、教師が補説する。） ・ 1797年ロシア人エトロフ島（北海道）に上陸。 ・ 前にも外国の船がきている。 ・ 北海道以外にも外国船がきている。 ・ 鎖国をしているのに、外国の船が日本に何回もきている。 ・ ロシア・イギリス……などの国が日本にきている。 ・ 幕府は北海道の方から守ろうとしている。 ・ 幕府は北海道の正確な地図がほしい。 ・ 北海道の地図をつくるのに天文方に頼んだ（高橋至時） ・ 正確な地図をつくるのに子午線一度の長さがわからないとできない。 ・ 測量のしかたを教えてもらいにきた。忠敬もぜひ正確な地図をつくりたくなった。 	
2. 調べて わかったことを発表してみよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 忠敬の行動年表と外国の様子年表。 ・ 地図資料。（外国船が日本にきた情況図） 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもに自由に発表させ、カード黒板に板書する。 	15分
3. 忠敬が日本地図をつくろうと思うまでのできごとを順序よく整理してみよう。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 忠敬が日本地図をつくろうと思うまでのできごと。 ① 北海道にロシアの船がたびたびきた。 ② 日本は鎖国していたので、幕府は北方の守りを固めなければならなかった。 ③ そのころ日本には正確な地図がなかった。 ④ 幕府は北海道の正確な地図がほしかったので天文方に地図づくりを命じた。 ⑤ 至時らは子午線一度の距離を測定したかった。正確な地図ができる。 ⑥ 忠敬も至時といっしょに子午線一度の長さを測り、地図づくりがしたくなった。 		10分
伊能忠敬は、正確な日本地図をつくろうと思った。			

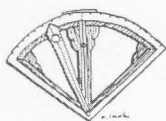
四。学習の考察

伊能忠敬の生きた時代は、日本近海にロシアやイギリスの軍艦が出現し、国防問題が重要な時代であった。また国内では、蘭学をもとに暦学や医学などの近代的科学が成長しはじめた時代でもある。

新しい学問の担い手は、身分の低い武士や地主・商人などの中から多くあらわれ、忠敬もその一人であった。忠敬が実測による日本地図の作成が達成できたのは、忠敬のすぐれた能力・資質とともに、多くの人々の支えがあったことを理解させることが必要である。

これらのことを理解させるには、伊能忠敬は佐原の人であり、洪水や飢饉にあった村人を救済し、現在も市民に親しまれ、尊敬されている人である。また、忠敬にかかわる遺書遺品が身近にあり、見学や閲覧が容易である。したがって、学習目標を達成させるには、適切な人物であるといえる。もと教師という職業癖で、学習指導案まで掲載してしまい失礼しました。

(さくま たつお・伊能忠敬研究家)



佐倉城跡公園

2006.6.30

江口俊子氏画

研究レポート『伊能忠敬』（五）

富岡八幡宮から川崎まで歩く！（その二）

石谷 春香

第七章 富岡八幡宮から川崎まで歩く！（つづき）

品川駅のホームの横の道を行くと、ホームの下にラーメン店がたくさんありました。「品達^{くんだ}」というお店です。テレビで「ギャル曽根」が食べていたところです。

少し行くと「八ツ山橋」です。橋の下にはいくつもの電車の線路が通っています。橋の下で休んでいると、意外によくゆれます。



このあたりから「旧東海道」になります。

「一番 東海道八ツ山口」という碑が立っています。

幅の広いマンションが見えます。少し行くと案内所があります。

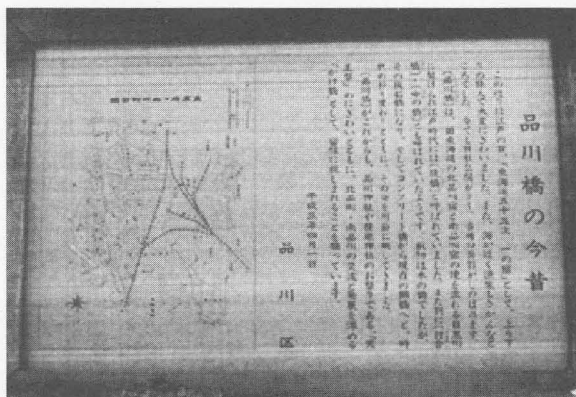
中に入ると、女の人が二人いました。「どこから来たの？」と聞かれたので「富岡八幡宮から歩いてきました」と答えました。すると今度は「どこまで行くの？」と聞かれたので、「川崎まで。」と答えました。時計を見て「まだだいじょうぶね」と言ってくれました。顔がとても白い人です。一〇円の地図を買いました。



少し行くと「四番新宿お休み処」が、だがしやの所に建っています。

自動販売機で水を買いました。斜め前の品海公園で休憩です。

ベンチで男の人と女の人が、ぐっすり寝ていました。



公園の入り口には
「品川宿」
川崎宿へ二里半
日本橋より二里
とあります。
昔このあたりは、
「品川宿」としてにぎ
わったところです。

少し行くと「品
川橋」です。
橋の上にベン
チがあります。
ちよつと変わ
った橋です。



さらに行くと
「街道松の広場」があり
ます。昔からの松があり
ます。

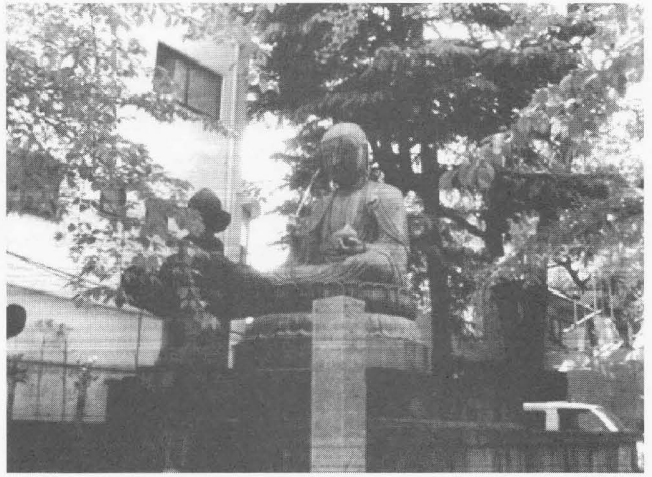
さらに進むと、また昔
からの松があります。



次に「天妙国
寺」があります。

このお寺には、
私の父の母の両
親とさらにその
両親のお墓があ
ります。私は初
めてお墓参りを
しました。

お線香を二本買いました。一本一〇〇円です。缶のなかに入れてくれ
ました。中に入るとたくさんのお墓があります。その中をずつと行き
ます。するとありました。お線香をお墓に置きました。そしてお墓に
水をたくさんあげました。なんだか不思議な感じです。ここは「青物
横丁」の駅が近くです。またいつか来たいと思います。近くのコンビ
ニでアイスを買って、歩きながら食べました。



さらに進むと品川寺があります。「しながわでら」と読むのではなく、「ほんせんじ」とよみます。品川区で一番古いお寺で、入口に大きな江戸六地藏があります。

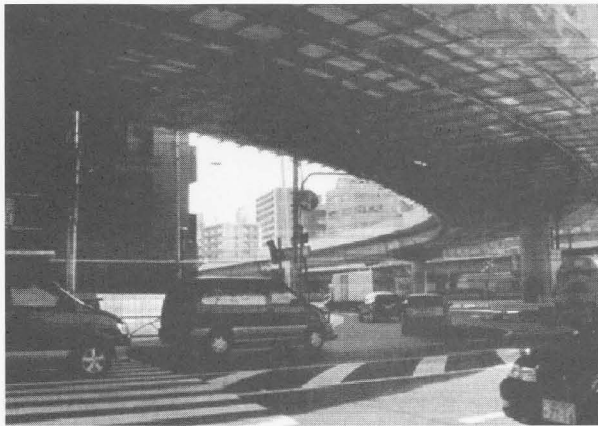
鮫洲商店街を歩きます。「十九番 北浜川」の碑があります。しばらく行くと橋があります。「浜川橋」です。「なみだ橋」とも言われています。昔、鈴が森の刑場に引かれる罪人と家族が別れた場所です。

下を流れる「立会川」は、ものすごくきたなく、変なおいがします。どうしてこんなにきたないのでしょうか？

橋を渡ると「天祖神社」です。しばらく休憩です。池に鯉が何匹もいます。カップルも鯉を見ていました。

この近くに昔糶谷（うしじや）の祖母が住んでいたそうです。先に進みます。

「二十三番 競馬場通り」の碑が建っています。少し行くと、なんだか来たことのある場所です。そうです。「鈴が森中」です。前にバスケの試合に来たところです。



近くに「鈴が森刑場跡」があります。明治四年まで、刑場として使われていました。

道路の上に高速道路が通っています。

コンビニに行つて水分補給です。暑いです・・・

横断歩道で反対側に行きます。しばらく行くとベンチがあったので一休みです。ベンチで休んでいると隣に井戸がありました。「磐井の井戸」です。その井戸の水を飲むとき、心が正しければ清水、邪心があれば塩水という言い伝えがあります。飲んでみたいと思いますが、ふたでしまっていて飲めませんでした。前にある「磐井神社」にも、ちよつとよりました。



少し歩くと「梅屋敷公園」です。ここは梅の名所です。今は五月なので梅は咲いていません。梅の咲く時期には人がたくさん来るそうです。公園では男の子二人がホームレスの荷物を開けて遊んでいました。ハトがいて、時計を見ると四時七分です。

その時男の子が道路に飛び出してしまいました。お母さんが「危ない！」というのと、バイクが急ブレーキをかけるのが同時でした。男の子はだいじょうぶでした。びっくりです・・・



「旧東海道」の碑がところどころにあります。コンビニで水分補給です。商店街を出ると高速道路が分かれています。川崎まで五キロメートルの標識があります。少し歩いていけると道路の反対側で、男の子が「ああ！」と叫んでいました。見ると帽子が風でとんで、道路の真ん中までいってしまっただけです。

信号を渡って反対側に行きます。「美原通り」に入ります。



少し行くと、京浜蒲田です。ここには糞谷の祖父の家に行く時によく来ます。「京浜急行空港線」が道路を横切っています。太陽がだんだんかたむいていきます。休憩をしようとコンビニをさがしましたが、なかなかありません。反対側には何軒かありましたが、こちら側にはありません。

Straight Burger
LOTTERIA

雑色店
大田区仲六郷2-43-2 03-3736-7304
"100円ロッテリアスタート!!"
バーガー・パイ・ポテト(S)・ソーダ・みんな100円
ドリンク回数券【6枚綴り】¥1000好評販売中
POST01 No. 90309 2007/05/04 16:44
品名 単価 数量 金額
外・ショコラ 390 1 390
*クリームショコラ 1 1
*メロンソーダ 1 1
小計 390
消費税等 0
合計 390
預り:現金 1,000 合計 1,000
50 予約 610
イター #47537 E/1

「雑色駅」の前のロッテリアに入って、休憩しました。

電車がものすごい音で走って行きました。そしてまたひたすら歩きます。歩く・・・歩く・・・



橋の途中で、
「神奈川県 川崎市」
の標識があります。
いよいよ川崎です。



ようやく橋が見えてきました。川崎まで一キロメートルとでています。土手を上がると景色が広がります。階段を上り、「六郷橋」を渡ります。橋はとても広いです。そして景色が
いいです。

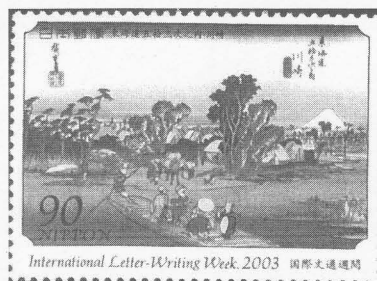


多摩川の太陽が
きれいです。





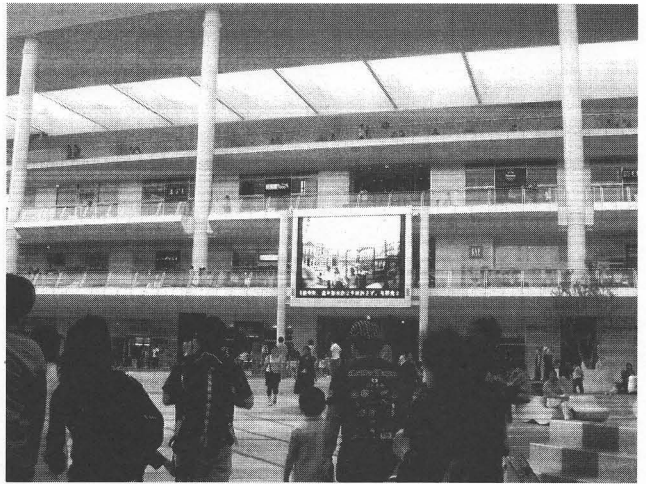
橋を下りると「旧東海道」の看板が出ています。右に行きます。「旧東海道」の碑があります。



東海道五拾三次之内・川崎

少し行くと人が急に増えていきます。途中で地下に入ります。この地下街が「カワサキ・アゼリア」と呼ばれています。





そしてエスカレーターを上るとJR川崎です。ものすごい人です。さらに進むと「ラゾーナ」です。ここでゴールです！
到着です。時間は五時四十五分です。

ここからはタクシーに乗って帰ります。「井田までお願いします」というと、「井田でいいだ？」と変なことを言われました。おもしろい人です。でも疲れているので笑えませんでした・・・

家に六時二〇分到着です。やっと帰れた・・・家に無事、到着しました。こんなに歩いたのは初めてです。七時二五分・家を出発、九時・富岡八幡宮を出発、五時四五分・川崎に到着、六時二〇分・家に到着。行きは一時間三五分、帰りは九時間二〇分でした。歩いた時間は八時間四五分！

ところで万歩計を見ると45,675歩になっていました。すごいです。それから一〇,〇〇〇分の一の地図で歩いた距離を測ると

231センチでした。1センチが100メートルなので、歩いた距離は231センチ×100＝23,100メートルになりました。以前歩測の実験で、私の一步を測った時、一步は73.94センチでした。今回45,675歩あるいたので、歩いた距離は、73.94センチ×45,675＝3,367,500メートルになりました。

築地の場外市場では人が混んでいてちよこちよこ歩いたり、コンビニ二店や公園をぐるぐる回ったりして正確ではありませんが、でも実際は、30キロメートルぐらい歩いたのではないのでしょうか。30キロメートルというと、川崎市中原区井田の私の家から鎌倉ぐらいになってしまいます。ものすごい距離です。

ところで伊能忠敬のことです。二〇六年前、五六歳の人間がよくこれだけ歩いたものです。一番不思議なのが、私は歩くだけで精いっぱいでしたが、伊能忠敬はこの距離を歩きながら測量していたのです。とても信じられません。

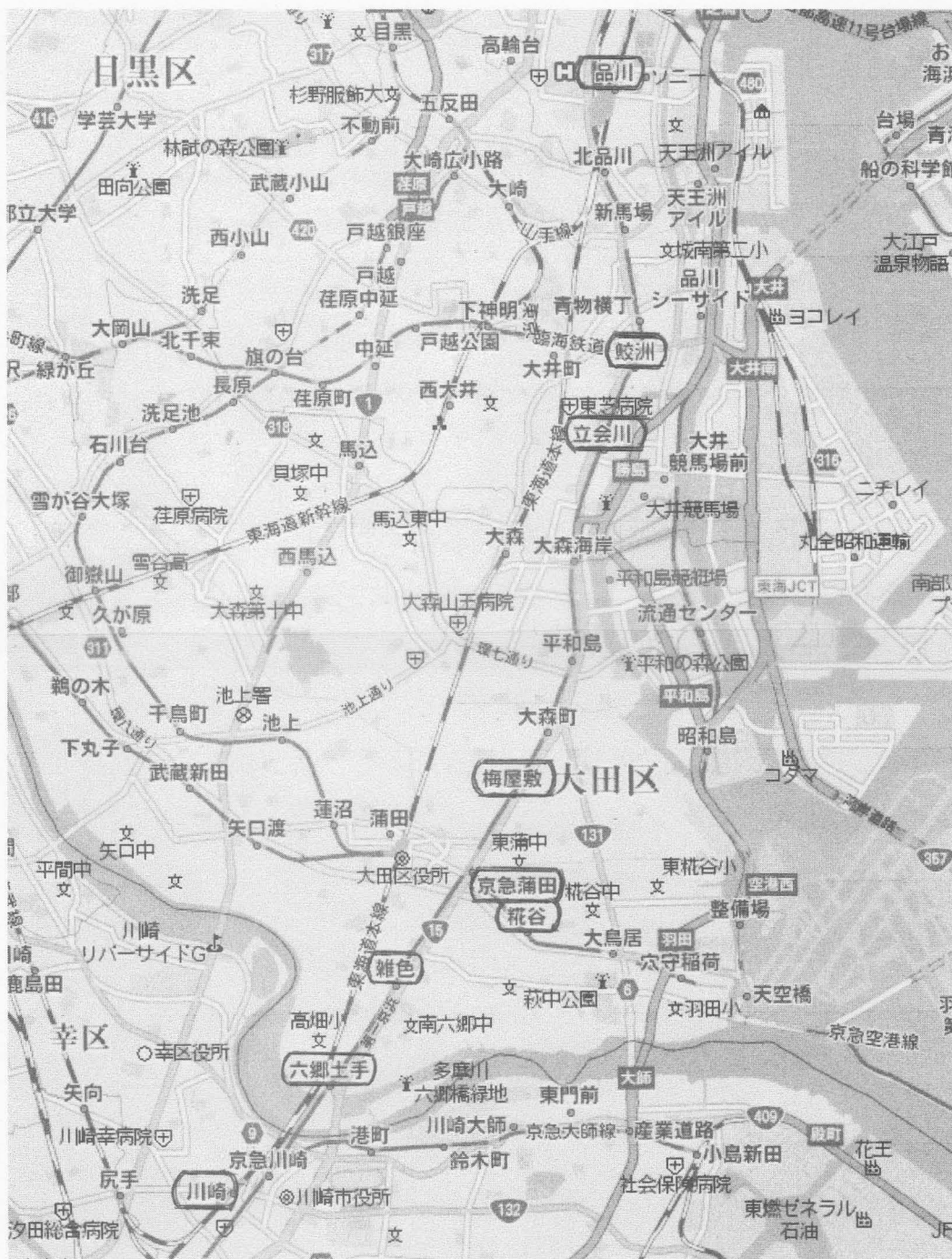
それから忠敬は、宿に着いても測量の結果を整理していたのです。そんなことは普通にはできません。

私は家に帰るとすぐにお風呂に入って休みました。忠敬はそれを毎日、何年も続けていたのです。

伊能忠敬はものすごい人です。本当にすごいと思います。

つづく

(いしやはるか・文教大学付属高等学校一年)



2007年5月4日 私の旅（品川～川崎）
—「富岡八幡宮から川崎まで歩く！」（その2）—



日食と伊能忠敬

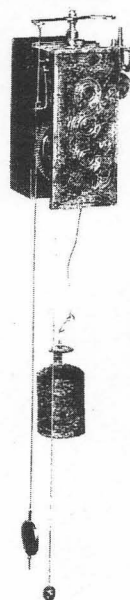


世界天文年である今年、二〇〇九年七月二十二日に日食が起こる。日本全国の各地で部分日食を、奄美大島、トカラ列島、屋久島、種子島などでは、皆既日食を観察することができる。日本の陸地で皆既日食を観察できるのは一九六三年七月二十一日以来、実に四十六年ぶり。次回は二〇三五年九月二日に北海道・北陸・北関東などで見られる皆既日食まで二十六年間起こらないので、非常に貴重な機会と言えよう。しかも今回は、継続時間が長い。東京では九時五十五分三十三秒から欠け始め、十二時三〇分二〇秒の終了まで続く。東京での最大の食分は〇・七四九、すなわち約四分の三まで太陽が欠けるのが見られる。今世紀最大の天文ショーとあって、皆既日食を観察できる屋久島や中国・上海などに旅行する「日食ツアー」が人気となっているという。ところで江戸時代にも日食はあった。忠敬先生が測量中に起こった日食は計四回だがうち三回はあいにくの曇天。文化七年に一回だけ豊後鳩浦で雲間から観測できた。その時の様子を『測量日記』から記す。「三月朔日・朝晴曇北風、日食測量。初き（※前より黒雲連々と出る。初き不測。それより雲間に食分を測る。食後一面大曇天、夜も同じ。」（※注 初虧^{しよき}（天）日食・月食で太陽・月の欠け始めること。）記述中、「食分を測る」とあるのは、測食定分儀や測食定方儀という機械で、太陽の欠け具合の程度や方向を測ることである。測食定分儀は望遠鏡の対物鏡の焦点部に装着して使うもので、間重富が初めて製作したといわれている。これらの測食定分儀・測食定方儀の他に、ソングラス・垂揺球儀などを使用したであろうことはいうまでもない。

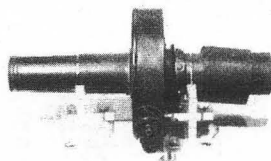
日食観測に使用した機器

（伊能忠敬記念館蔵）

垂揺球儀



測食定分儀



望遠鏡



日眼鏡（ソングラス）



柏木家に残された忠敬資料(二)

柏木 隆雄

忠敬は神社仏閣に信仰とは異なる特別な執着を持っていた。造詣が殊のほか深かった、と思える資料がたくさん残されている。測量日記の記述からもそれを窺い知ることができる。測量の旅の途中、主な神社には必ず表敬し、拝領した資料「書上」から、神社の創立・縁起、霊宝、御朱印石高などを日記に記録した。

因みに、奈良大和路測量の際に、訪れた神社は、法隆寺、東大寺、春日大社などで二十数ヶ所に及び、神武、天武、垂仁等の天皇陵にも参拝している。拝領し、持ち帰った資料は、佐原の記念館にも数多く残されており、歴博への柏木家寄託資料五十九点の内、十三点が神社に関するものである。

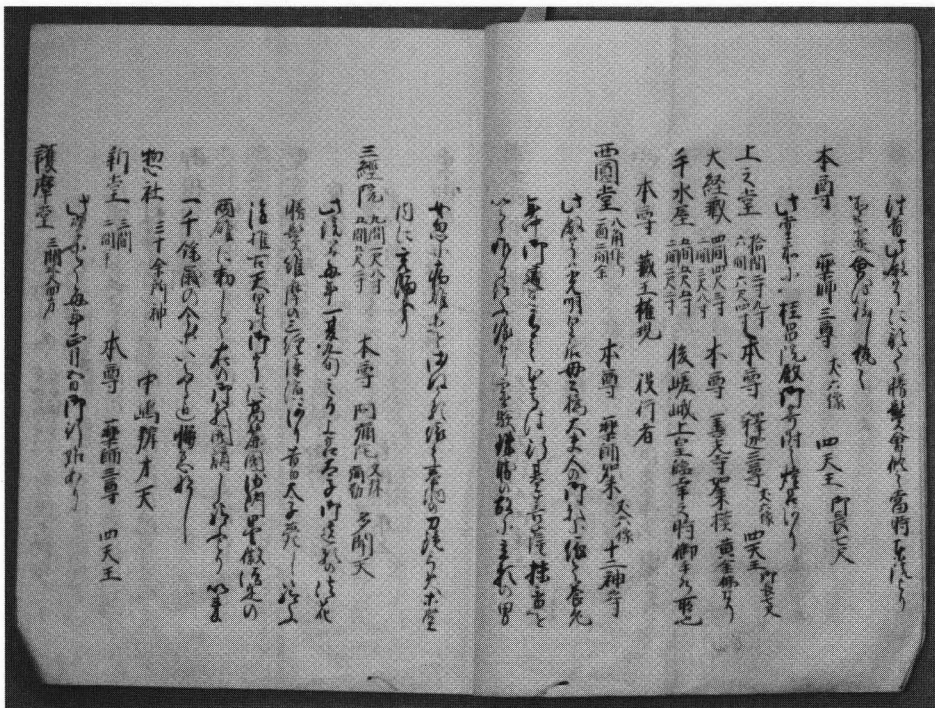
生駒山地、矢田丘陵を背景とし、大和を巡る河川の流域に蒼然と広がる斑鳩の里は、日本歴史の古典・法隆寺の里でもある。

忠敬がこの地を測量したのは、第六次測量の文化五年十二月朔日、大坂測量を終えて大和路に入った。

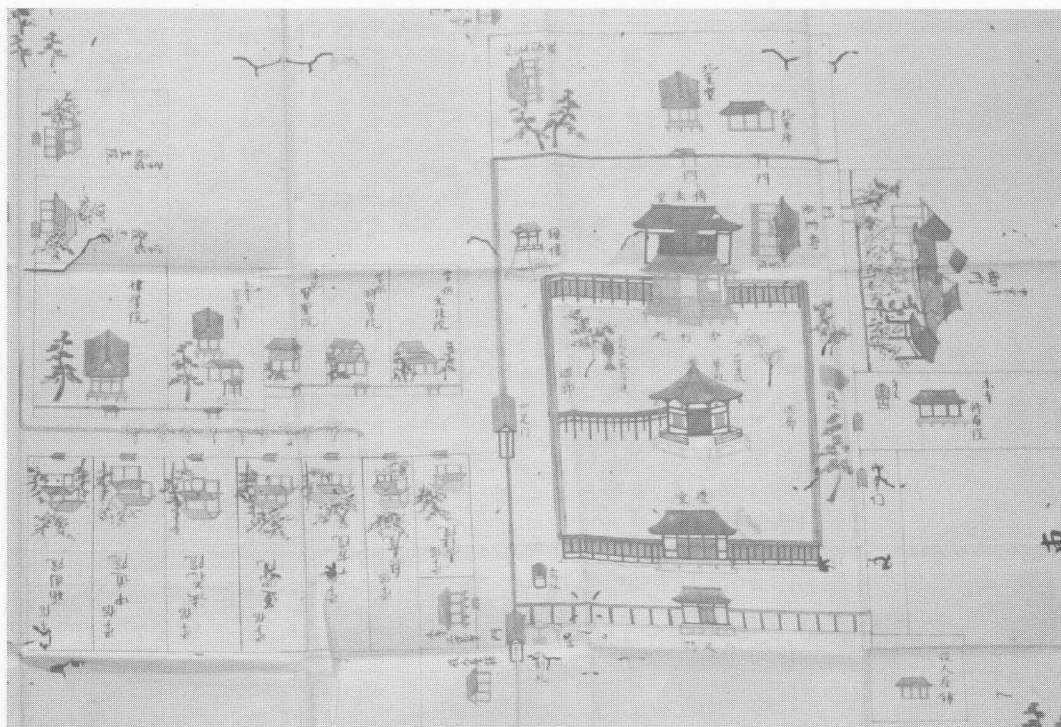
その日の測量日記の全文を記す。

「十二月朔日晴天。朝六ツ後当麻村出立。無測量にて同国葛下郡王子村へ立帰。昨日残印より初、同国平群郡(楽人領)神南村(木村宗右衛門支配)稲葉車瀬村(植村駿河守御領所)小吉田村(同上)竜田村迄測、中食。同所より初(植田御領所)法隆寺村字新町(又並松という)迄測、印杭を残し法隆寺門前迄測、九ツ頃法隆寺村へ着。止宿

百姓平右衛門(一軒)それより法隆寺へ越、諸堂拝覧、霊宝一見。
(加)藍靈宝別紙にあり。御朱印千石



⑦法隆寺霊宝目録 「(4行目)御堂前に桂昌院殿御寄附の燈呂阿リ」と見える



⑧伽藍東院部分（中央の建物は夢殿）

日本最古の木造建築物、法隆寺の大伽藍を眼前にしたわりには短文で淡泊な記述である。前日の日記（十一月晦日）と比べてみると尚更にそう思う。当麻寺では、寺院の説明だけで法隆寺の日の記述とほぼ同じ字数を費やしている。

当麻寺について、忠敬は簡潔に寺の概要を記しているが、次の記述は面白かった。

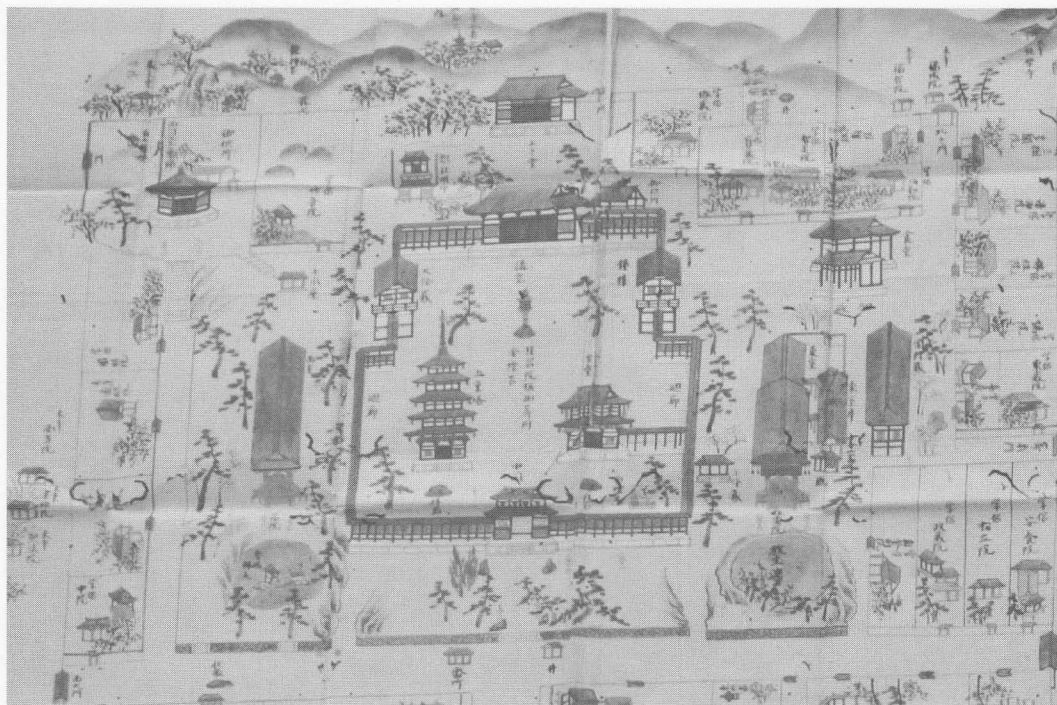
「奥院襖、本多政勝の寄付、天樹院（千姫）伏見の居室なりという。古金襖狩野永徳画に好」忠敬の日記には珍しく、雅趣の心が少し動いた瞬間である。（閑話休題）

ではなぜ法隆寺の項の記録が空白だったのかという疑問は、日記の最後の一行で解決する。「加藍靈宝別紙にあり」

忠敬は法隆寺側から伽藍と周囲の末寺まで描かれた絵図と靈宝目錄を拝領しており、そこに法隆寺の全容が描かれ、または記載されているので日記での説明は避けた。次に紹介する資料⑦⑧⑨がその時の拝領物ではないかと思われる。

四、大和国法隆寺伽藍寺院境内之図

この手書き彩色図の大きさは、（二〇五×一一六）南大門から北に向かったの俯瞰図として描かれている。全体図では、下辺に参道として今に残る松並木が細々と筆写され、中央の左右に西院伽藍と東院伽藍を配し、上辺には矢田丘陵の峰々と法輪寺、法起寺の塔屋などが描かれている。建造物の開扉部分と階層を支える柱の部分に、全て鮮やかな朱が入っている。境内に点在する百本をこえる松の緑が美しい。



⑨伽藍西院部分(中央の建物は五重塔)

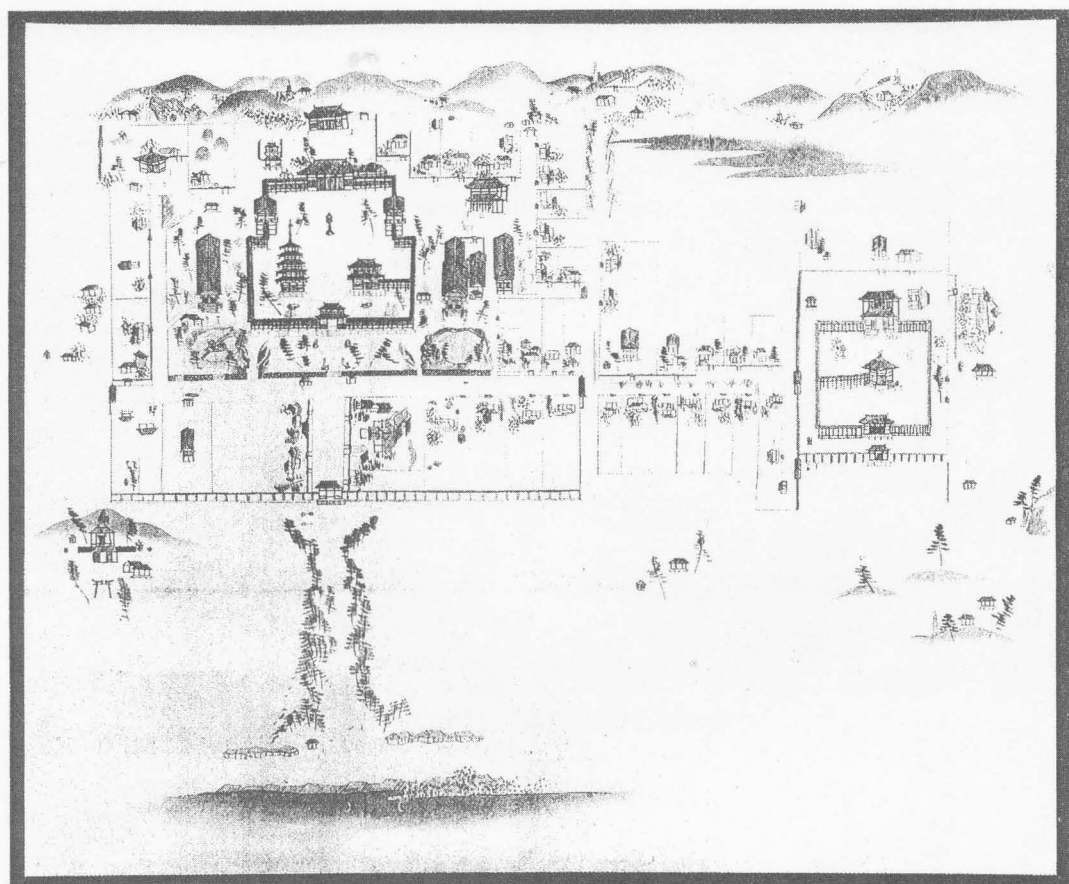
さて、この絵図は、いつ誰が描いたものかを、絵図の複写を送って法隆寺（広報）にお伺いをたてた。春三月、旅行者が動き出し、修学旅行たけなわの多忙な時期にもかかわらず、ていねいなご回答を頂いた。その要旨を記す。

「法隆寺所蔵『寛政九年境内図』と比べてみると、学坊の政南院が喜多院、また中道院が橋之坊となっている。寺内の記録では、橋之坊が安政四年に中道院に改名されている。また明治三年の境内図では、文殊院が福生院となっているので、当該境内図は安政四年以後、明治年までのものではないかと考えられる」。

なお、参考資料として数点の伽藍絵図と境内配置図が添えられていた。その中に、当該絵図とまったく同じ描写図があった。『法隆寺古絵図解説』No.246『建築古図4』である。解説によるとこの古絵図は、一九六九年に境内の西園院で発見されたとある。ただしこの絵図には堂塔、塔頭、学坊などの書き込みが一つもない。文字のない絵図そのものである。忠敬資料の絵図では、全ての建造物、池に至るまで、ご覧のとりの書き込みがある。この相違を推理してみた。

この絵図は、文化五年の忠敬測量時の頃には法隆寺側に何枚かが用意されていた。忠敬は公儀御用として絵図と霊宝目録を寺側に所望し拝領した。そして後日、霊宝目録と照合しながら諸々の書き込みを行った。因みにまったく同じ描写のもう一枚の絵図（明治九年、『建築古図五』）には、堂塔の名称のほかに、漢詩や和歌のおびただしい書き込みがあった。

絵図は誰が描いたかとなると、これは判らない。法隆寺側の絵図に



No. 246 法隆寺古絵図解説 (『建築古図4』)

法隆寺提供資料

も描き手の名前は一つも見当たらない。絵としては、イラスト風の楽しいものであるが、稚拙である。

聖徳太子御遠忌一三八〇年記念、東京高島屋で催された「法隆寺展」の図録に、江戸時代に描かれたという「聖徳太子絵伝」が掲載されている。太子誕生から薨去までの一代記で、大和絵風の四幅のものである。これは解説によると延久元年(一〇六九)河内の絵師である秦致貞によって、絵殿の障壁画に描かれたものを、天明七年(一七八七)に吉村周圭が制作した模写である。と記述されている。この絵図を資料⑧⑨のものと見比べてみた。建造物や松の木の形態の描写がよく似ている。

吉村周圭の弟子の一人が、境内案内図を何枚も修業を兼ねて描いていたのであろうか。

なお、参考資料⑩、大和国を含む六国の絵図の表紙を集めた写真を掲載した。これらはいずれも木版刷りで、刊行された年代を順に挙げると、元文、寛保、安永、天明となる。

この時代は近世浮世絵の熟成期であり、春信や清長が台頭し、木版刷りの技術も急速に向上した。それと期を同じくして刊行された六帖の国絵図は、いずれも美術品に相当する。

なぜ、いまここで六国の絵図について記述したかと言



⑩大和国ほかの六ヶ国絵図表紙

うと、忠敬は第六次測量の資料として、法隆寺絵図と共に、これらを江戸に持ち帰ったのであり、それらが後年、なぜか伊能家ではなく、柏木家に伝わり保存された。依って、法隆寺絵図は、幕末・維新前後のものではなく、忠敬の法隆寺訪問以前の制作によるものと私は推理した。

五、法隆寺佛閣霊佛寶物等目録

忠敬が伽藍絵図と共に、寺側から受領したと思われる霊仏霊宝録である。

参詣、参拝した寺社は二十数ヶ所に及ぶ、と書いたが、佐原の記念館に残る資料によると、寺院の数は二十七、神社は四ヶ所。それぞれに「書上」^{かきあげ}を受領しそれを忠敬は克明に筆写し『大和国寺社霊宝録』としてまとめあげた。この忠敬自筆のものは国の重要文化財に指定され、記念館の所蔵となっている。

当研究会顧問で記念館の館長だった佐久間達夫氏が解説された法隆寺の項の記述と歴博所蔵のこの目録とを照合してみたが、助詞や言葉のつながりに微細な違いはあるが、実に正確に写しとっている。

内容は、最初に「寺号」。法隆寺は法隆寺問寺のほかに宝龍寺、聖国寺など九つの寺号を持つ。次に寺院の「縁起」。人王三十二代用明天皇の歿願に依りて、聖徳太子十五歳の時、初めて御建立の大願を發し、龍田大明神の告勅に任せ、斑鳩の山乃麓に勝地を定免給。(以下略) 続いては、個別建造物、霊宝、仏像など、南大門の説明から始まって伽藍配列の順を追い、詳細な説明が施されている。

その一部を紹介しよう。

一、五重宝塔

五間三尺四方、高二十五間 四方正面なり 此塔の内 四方に練出を以て山雲の形を作り 其の内に仏菩薩等の像を尊仏師作る

東正面 文殊 維摩 不二法門の所 菩薩声聞等

南正面 弥勒 曼荼羅法苑大妙の二菩薩 二王 二天等

西正面 釈迦如来茶毘の後 舍利奉納の宝塔等安置候

北正面 釈尊涅槃像菩薩 十大弟子等

一・夢殿

八角作 一面一丈五尺五寸

上宮王院又は聖堂と云う。聖徳太子平生入定観法の所なり。大隨国衡山の般若台にありし前生御所持の法花經と来り給ふも此殿なり

一・絵殿

文殿院と号。聖徳太子御一生の絵殿なり

御三条院の御宇秦致眞図絵なり

本尊 夢違観音 此宝前に赤松彈正氏範寄進の燈呂阿り

一・中宮寺

如法 比丘尼御所なり 太子の母 間人皇女の宮所なり。本尊

二臂如意輪観音 聖徳太子御作

最終頁には、法隆寺の知行一千石余と記されており、寺に働く役人の役職と人数、末寺塔頭の名称が示されている。最後の記述は、「右諸伽藍並堂方 諸末寺等皆以学侶支配に御座候。右目録大概如斯御座候 以上」

和綴二十三頁に及ぶ目録の概要を記したが、目録の説明文に徳川幕府支配下の時代の背景が窺える興味深いものが記されていたので紹介し筆を擱く。

一・講堂の項の付記

「御堂前に桂昌院殿御寄付の燈呂阿り」

いまも存在を示しているこの金銅製の立派な灯籠を、桂昌院がいつ寄贈したかを推理してみた。日光東照宮、陽明門前の南蛮灯籠は伊達政宗の寄贈によるものであることはよく知られている。

よほどの権力者でない则由緒ある寺社に奉名を掲げた寄進などできない。またそれなりの然るべき事由を要する。では桂昌院にはどんな事由があったのか。

『徳川実紀』によると、元禄十五年（一七〇二）に、桂昌院は朝廷から、女性最高の官位である従一位と藤原光子の名前を賜った。その受勲を記念しての灯籠の寄贈であつたと思われる。

それにしても、灯籠が据えつけられた位置は、講堂—五重塔—金堂を結ぶ三角形のど真ん中（絵図⑨参照）、法隆寺伽藍の最高の場所である。女帝・桂昌院の顕示欲の凄まじさを物語っている。

一・阿弥陀院の項の付記

慶長十九年（一六一四）十月十六日 東照宮大坂御出陣之時の御宿坊なり。其時の御座間今に有し外御宮御神像安置し奉願

家康は、大坂冬の陣への参戦の途上、ここに寄り戦勝祈願を行った。

（次号につづく）

【資料】

（かしわぎ たかお・税理士・作詞家）

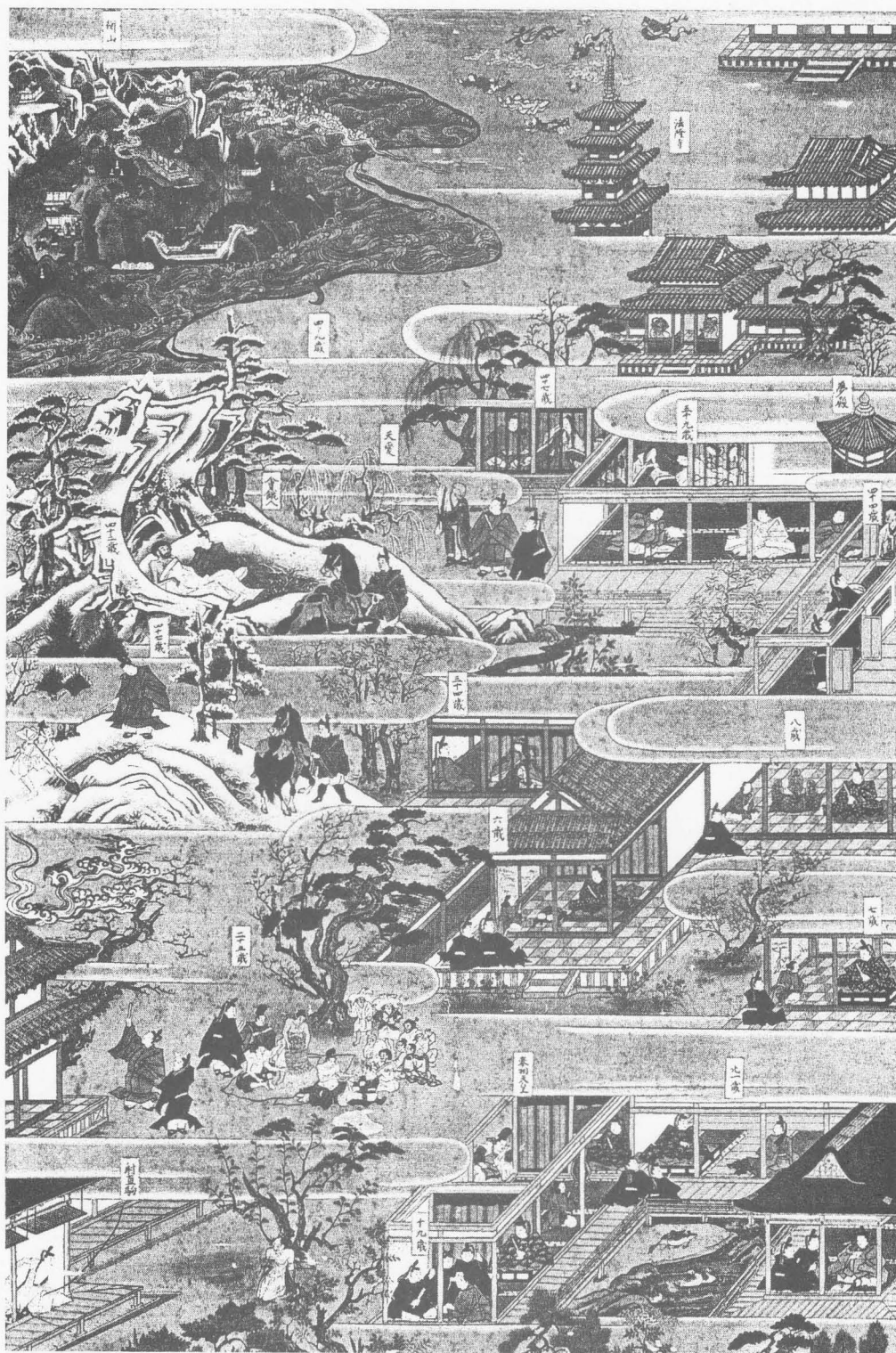
『大和国寺社霊宝録』伊能忠敬記念館蔵 佐久間達夫読文

歴博への寄託者 香取市佐原 柏木俊一

写真撮影

成田市

佐藤 勲

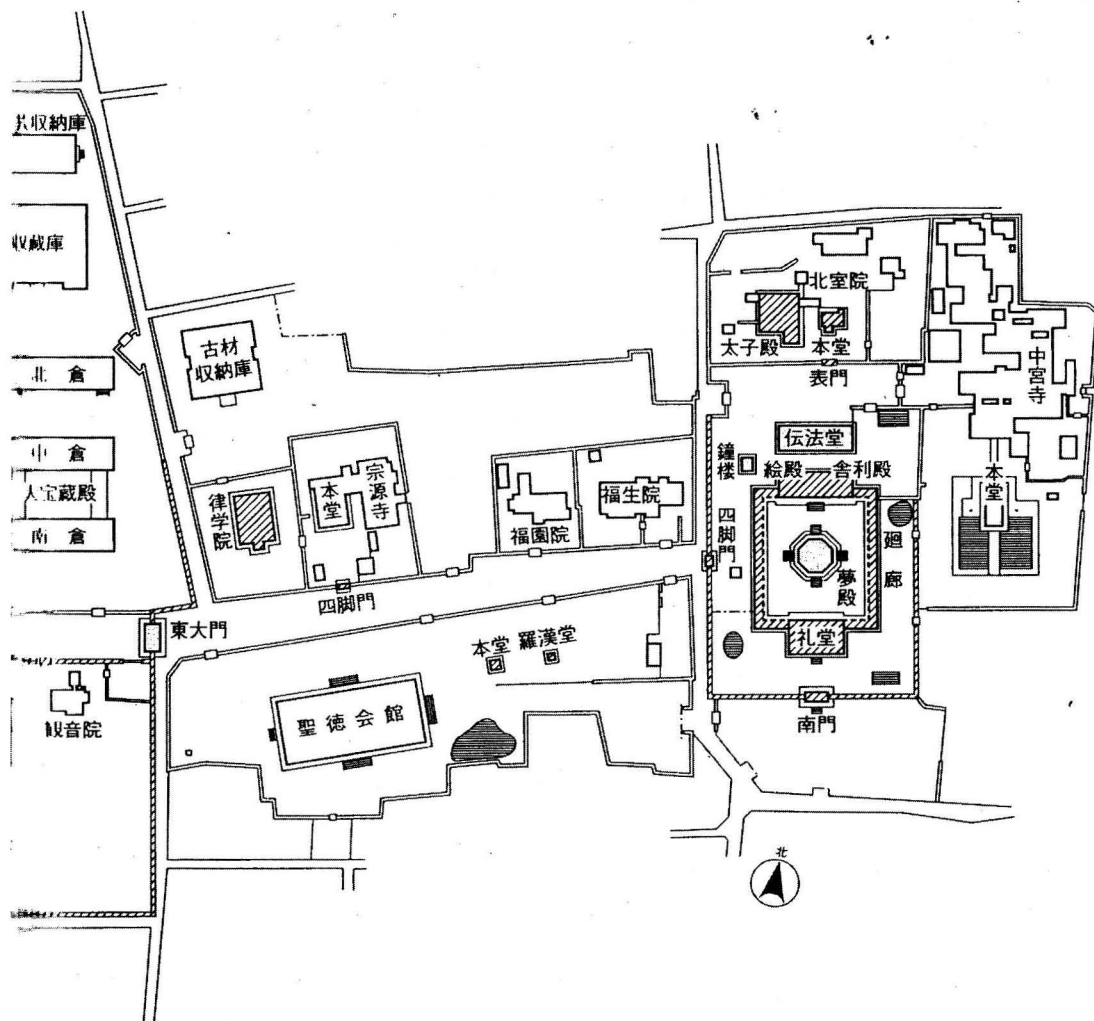


「聖徳太子絵伝」部分

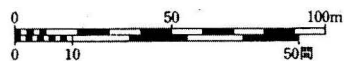
「法隆寺展」図録より

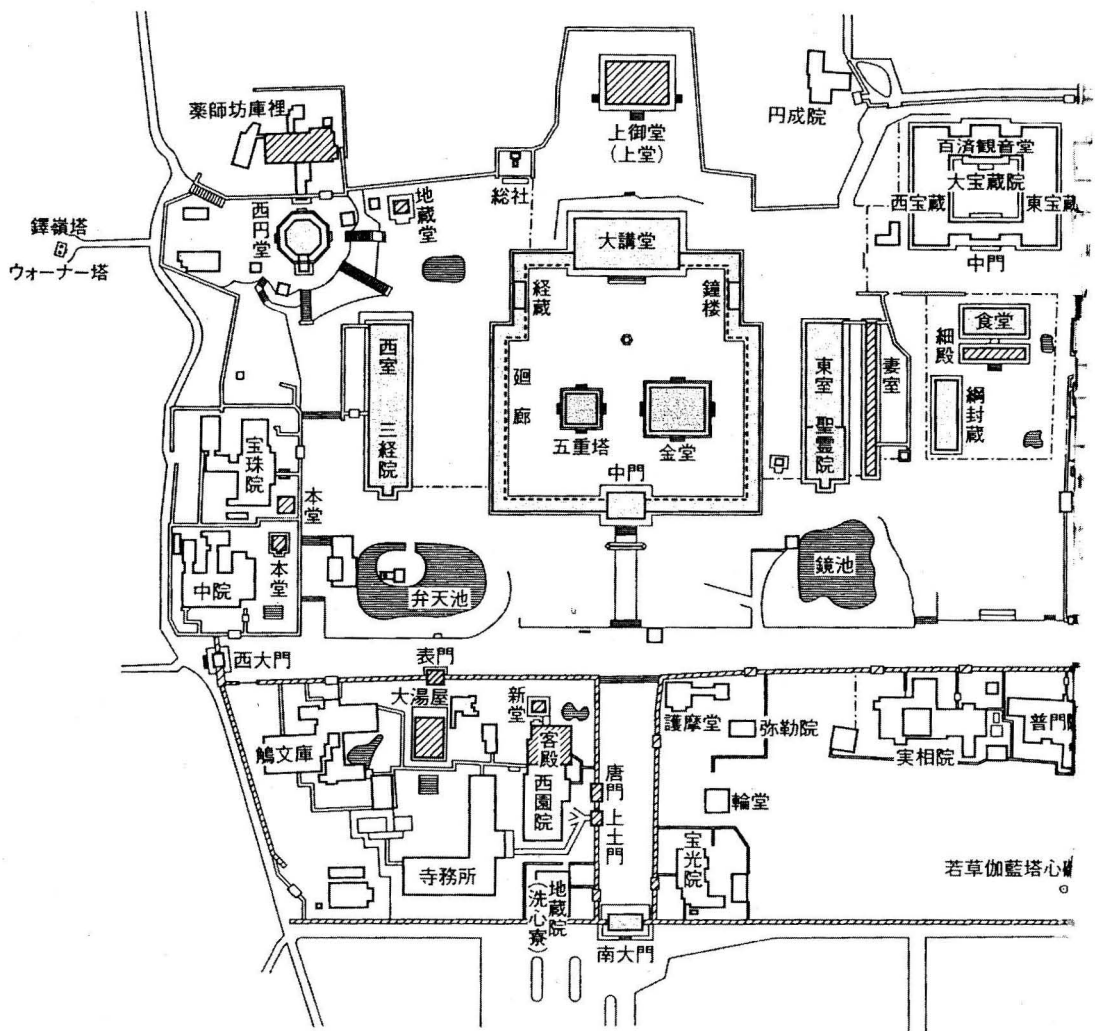
法隆寺境内図

- 国宝指定建造物
- ▨ 重要文化財指定建造物



「法隆寺展」図録より





和算の人脈（補遺）

安藤 由紀子

一昨年のこと、編集の前田さんから「測量中の伊能秀藏さんが宿泊先で地元の人に出した和算の問題を、ホームページで見つけましたよ!」というメールをいただいた。新潟日報にリンクされている、『数楽研究所』というそのホームページをさっそく開いてみると、山口和（かず、やわらと読んであるものもある）という「遊歴和算家」の『道中日記』が紹介されていて、その中に伊能忠敬の次男（庶子）、秀藏の記事が載っていた。

さっそくサイト『数楽研究所』の作者、本田博之氏に連絡を取ってお願いし、『道中日記』の原本のコピーを送っていただいた。

「遊歴和算家」とは、旅をしながら地方の門人に高度な数学を教えたり、埋もれた才能を見つけて中央へ誘導したりした人たちのことである。中央から地方への和算の普及には、江戸時代ならではの方法があったわけである。佐藤健一著『和算家の旅日記』によれば、山口は、自身高名な和算家であり、かつ詳しい道中記を残したことで、特に有名な人なのだそうである。

記録を残した遊歴和算家

江戸中期の大坂の呉服商、大島善右衛門は、記録を残した最初の遊歴算家だといわれている。

大坂は商人の町で、和算は特に盛んであった。宅間流というグループが活躍し、麻田剛立・高橋至時・間重富もその流れの中にいる。

大島は、根っからの数学好きで、財力に任せて、和算家たちを自宅

に招き、講義を受けた。その名簿には、関西の当代一流の数学者たちのほとんどが名を連ねていたという。個人指導の範囲は数学のみならず、測量・天文にまで及んだ。

授業料は多額に上り、店は傾き、妻子まで失ってしまう。残ったのは数学だけになったことを知った彼は、それを教え歩く旅に出て、それからの生涯を送った。享保一八（一七三三）年四月、旅に病み、芭蕉のように、弟子たちに見守られて息を引きとったという。教え歩いた土地は、摂津・河内・和泉・播磨・阿波・淡路の五力国に限られ、定期的に何度も巡回した。固定化した弟子たちの家を、あるカリキュラムに従って何度も教えて歩いたように見える。大阪の言葉の通じる範囲、呉服屋時代の取引先を中心とした人脈だったのではないかと想像されている。

およそ一〇〇年後の幕末に遊歴記録を残した異色の和算家がいる。天保七（一八六三）年、甲州一円に及ぶ大規模な一揆「天保騒動」が起こり、死罪一三名を含む五〇〇人以上の受刑者を出して終わった。大月の手前に犬目の宿があつて、首謀者の一人に犬目の平助という人がいた。彼は磔刑の判決を受けたのに、幸運にも、逃亡に成功した。

日記を残したので、経路も分かっている。数か月で手持ちの金が乏しくなると、彼は僧衣をまとい、托鉢によって米や銭を得た。経文を唱え終わると、そろばんも教えられると言ったらしく、一晚泊について教えてくれということになり、村内の農家を順泊しながら教え歩いた。名主の家で臨時のそろばん塾を開いてたいへん喜ばれた。

彼は高度な数学者ではなかったが、そろばんを教えているうちに彼なりの方法を確立したのだろう。彼は名主だったらしく（妻は名主の娘と分かっている）読み書きそろばんはもとより一揆を率いる能力さえあったのだと思われる。若い時に学んだ数学は、『塵劫記』のような

初歩的な内容であつたであろうから、高度なものは無理としても、庶民が必要とするものは与えられたのだろう。比例計算・両替算・開平法なども教えていたらしい。こうして四国八十八か所の巡拝まですませ、高野山の寺に自分で書いた「算法書」も残した。

日記は一年分しか残っていないが、結局逃げおおせて逃亡から三年後、木更津（千葉県）に住み、妻子を呼び寄せて寺小屋を営んだと伝えられる。

山口和

そろばんを使う日用算術ばかりではない。大勢の当代一流の和算家たちが、江戸や大坂で発達した高等数学を地方の学者たちへ伝えるために遊歴活動を行った。

関流の和算は日本全土に普及していたが、後期に普及活動を活発に行つたのは、長谷川道場で、江戸の神田中橋にあつた。優秀な門弟がそろい、教科書や書籍の出版にも力を入れていた。地方を遊歴し、高度な授業を行い、優秀な人材を見つけて、江戸に誘つたりもした。この道場の高弟に、越後生まれの**山口和**という人がいた。

彼は文化一四年春から六回にわたって日本中を遊歴し数学を教え、神社仏閣に掲げられた算額を写し取りながら旅をした。この旅日記が冒頭に触れた『道中日記』である。

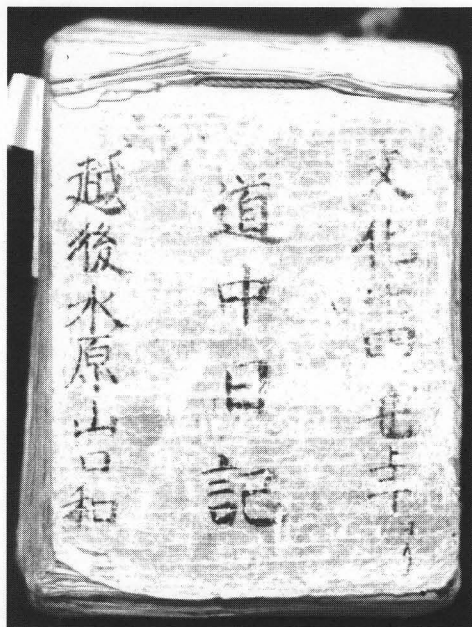
彼は水原（すいばら）村（現新潟県阿賀野市水原）の人で、名は倉八又は和、号は坎山。特定できないが、寛政年間の生まれという。

江戸に出て、神田中橋にあつた関流最大の長谷川道場の門人となつた。道場の高弟として、教育のほか、教科書や書籍の編集に携わっていたが、文化一四（一八一七）年江戸の道場から第一回の旅に出かけ、文政一一年までの一二年間に六回も旅に出て、青森から熊本まで総計

一万八千キロも踏破して和算を教えて歩いたという。

第一回目の旅は霞ヶ浦から利根川流域を回る旅であつた。玉造の数学好きの隠居の家に四月二十四日まで、四泊もして知り合いたちにも数学を教えそのご隠居などを弟子にした。

二五日には佐原の旅籠に泊まっている。伊能忠敬は没の前年で、亀島町で地図仕上げに忙しかつた頃だ。翌日は大倉村の側高大明神へ行つて、津宮村の久保木姓の者たち六人が納めた真新しい算額を見ている。久保木清洲にゆかりある人たちであろう。成田参詣もすませて、五月一日には帰府している。第一回目に彼は伊能グループと接触範囲内にあつたことになる。第二回目は、常陸の海岸を北上して奥州を一回りし、千葉胤秀という人材を発見して長谷川道場へ入門させた。



文化十四 丑与丁ヨリ 道中日記
越後水原 山口和

第三回目の旅は、文政三（一八二〇）年七月二日から二年四か月

にも及び、北陸・山陽道を通って熊本まで渡り、帰りは山陰道を通る大掛かりなものであった。これでほぼ全国を周遊したことになる。

全六回のうちの三回は前半弟子になった家々を回っただけで終わってしまつたという。一回出歩くと弟子が増え、拠点もどんどん増えたからであろう。

山口和は芭蕉の句が大変好きであつた。芭蕉の旅を、自分に重ねていたように見える。神社仏閣を回ったとき、奉納されている算額と、芭蕉の句碑は、漏らさず、その道中記に写していたように見える。句碑は石なので現在も多く残っているが、算額は現存しないものが多く、記録された史料としても、貴重なものである。挿絵も描いているので、臨場感もあり、読んでいて楽しい。

この回の『道中日記』に、一七年前の享和三（一八〇三）年に行われた第四次測量隊の隊員、伊能忠敬の次男秀蔵と、その時内弟子として参加したと思われる小野栄重のことが記されている。

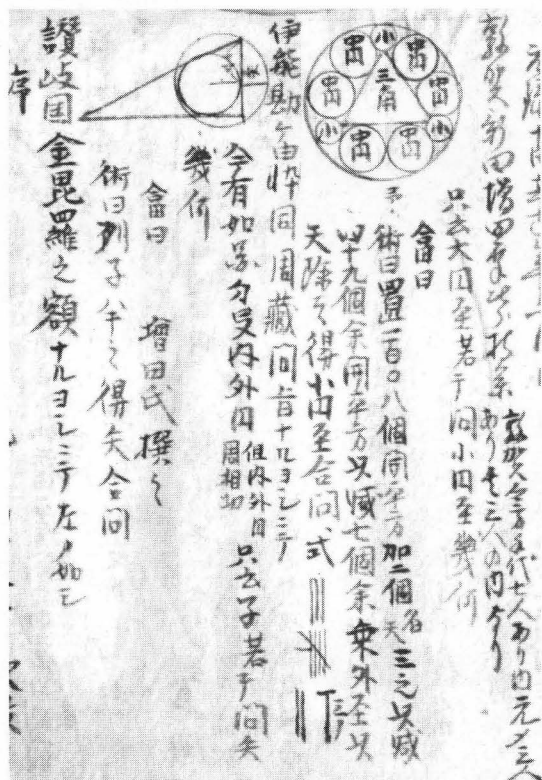
山口はこのとき、芭蕉のあとに従うように親不知、市振を過ぎて文政四年一〇月三日に金沢に着いた。伊能図が上呈され、忠敬の喪が発せられた頃である。いずれこのニュースは彼の耳に届いたと思われる。

金沢では数学の教授活動はせず、珍しく見物をして回っている。一〇月四日、金沢を立ち、小松宿（現石川県小松市）を通り抜けて、越前国西田中村（現）の桃井小八郎の家に行った。桃井家は室町時代から伝わる歌舞音曲の家柄で、三五〇石取の武士でありしかも、山口の門人であつた。桃井氏の知行所である敦賀新田の庄屋平野矢兵衛宅で一四日まで逗留し、この間、たくさんの人を弟子にした。

山口来訪のうわさを聞いて庄屋平野矢兵衛家には、和算好きな人たちが訪ねてきた。敦賀新田に住む郷方手代の増田幸次郎という人が、問題を三つ持って来て、山口に見せた。

伊能秀蔵

その三問のうちの二番目に「伊能勘解由悴、同周蔵、問旨ナルヨシニテ」として次のような問題が書き写されている。



（中略）

伊能勘解由悴、同周蔵、問旨ナルヨシニテ

敦賀新田増田幸次郎持参、敦賀郷方手代七人あり、内、元々三人あり、其三人の内なり

図

今有如図勾股内外円、但内外円周相切 只言、**子**、若干問幾何
合田 曰、**増田氏撰之**
術曰、**列子**半之、**得矢**、合同

【解説文】

伊能勘解由の息子周蔵が問うた問題の由

いま図の如き直角三角形・内円・外円がある。
(ただし内外円周はたがいに接している)

「子」の部分の値が与えられている時、「矢」の
値はいくらか？

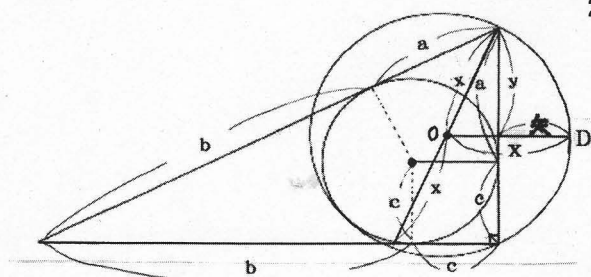
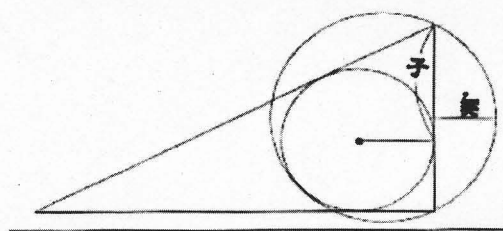
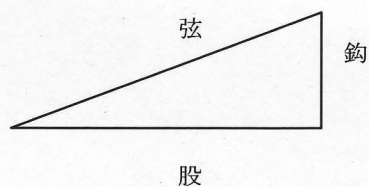
(増田氏による答え)

解法は、「子」を二等分すれば「矢」
を得る。合同(正解)。

下段、図2のような補助線を引き、三個の三角形の相似を使って、
連立方程式を立てて解く。

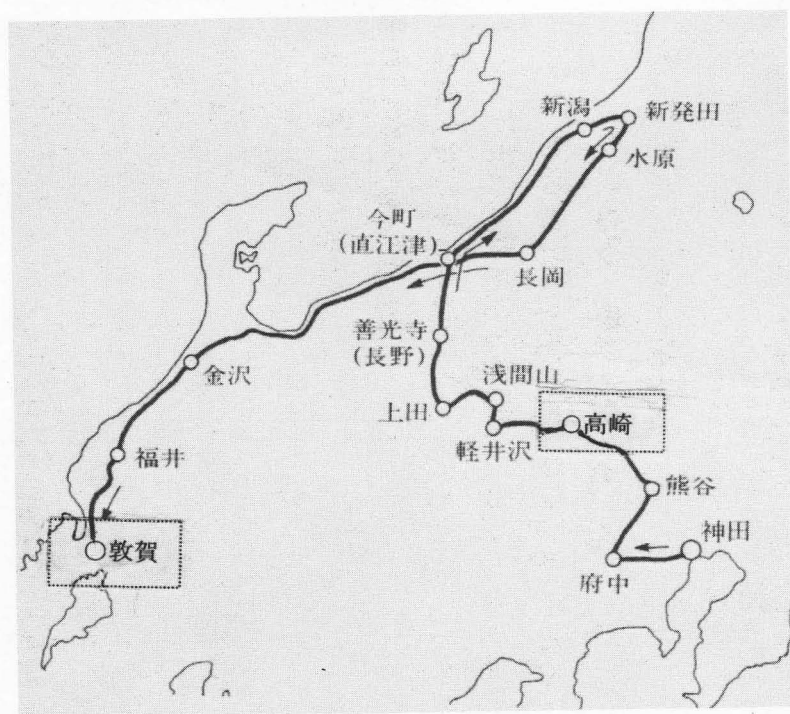
正解は・・・「子」の値の二分の一が「矢」となる。

ここで「矢」とは、弦(ここでは「鉤」にあたる)の直角二等分線のことであ
る。また「図」は下段に拡大してある。



この問題に対して、山口がどんな評価を与えたかは書かれていない
が、当代有数の和算家がその道中日記に記載するに値すると判断した
もののなのであろう。
一七年の開きはあるが、忠敬の第四次測量と山口の第三回遊歴の接
点を確認するために、次のルート図を参照してほしい。

文政三（一八二〇）年一〇月
山口和遊歴ルート



— 50 —

敦賀新田の増田氏のことは、伊能忠敬の第四次「測量日記」にも出てくる。

一行が敦賀を通過したのは、享和三（一八〇三）年五月だから一七年前のことであるが、「測量日記」には、「五月二六日久々坂峠を超えて越前国に入り、その夜は敦賀郡足田村に泊まった。日中はこの地の郷方支配役人、増田友右衛門・高崎祖平太が、一行の案内役を務めた」と書かれている。

一方山口の『道中日記』の方には、増田幸次郎は、「七人いる郷方手代の元締め三人のうちの一人」と書かれており、職業柄も数学の能力の高い人であったのだろう。一八年前に忠敬一行を案内した増田友右衛門の弟か後継ぎか、七人の手代仲間の一人とみて差支えないと思われる。

敦賀測量のとき、一行八人は麻疹に悩まされ、元氣なのは忠敬と秀蔵だけで、この二人で測量した日々もあった。病人たち六人は、駕籠か船で次の宿まで運ばれた。秀蔵は疲れ切っていたはずなのに、和算の問題まで出して、地元の人たちの相手をしたのだろうか。

もともと彼はまだ一七歳で、最初の測量に一四歳で従事してから三年経ち、この回が絶頂期であった。幕臣が参加するようになってからは、（尾形啓次郎とともに）適応障害に陥り、次第に影が薄くなっている。学問上の劣等感を抱えていた上に、第五次測量の不行跡をすべて内弟子の責任にされるという不運が続いた。

四国測量の途中からは、病氣と称して帰国してしまい、以後再び測量に戻ることはなかった。アルコールに頼るようになり、文化十二年には父に勘当されてしまう。和算の能力はあったと思われるのに、おいしいことであった。

小野栄重

この第四次測量隊員たちの中に、この回だけ参加した小野栄重という人がいた。五月二七日敦賀で麻疹にかかり、二〇日後の六月一五日、全快し出勤したと、測量日記にある。山口和の『道中日記』には、彼のことも記載されていて、この記載のおかげで、今まではつきりしなかった小野の経歴が分かった。

小野栄重は宝暦一三（一七六三）年に、上州安中の板鼻宿（現群馬県安中市）に生まれ、江戸に出て、関流の藤田貞資の門に入った和算家である。字（あざな）は良佐という。「関流六傳」の免許を得た大家である。「道中日記」に家名は「いびや」と書かれているから、板鼻宿の商家かもしれない。

一年前の第三次日本海沿岸の測量の帰途、忠敬一行は善光寺から軽井沢を経て享和二年一〇月一六日に、板鼻宿を測量し、高崎城下に宿をとった。その夜「板鼻捨五郎来ル」と測量日記に記載されているのが、この小野栄重かもしれない。というのは、小野はその年の末に、忠敬の後を追うように江戸へ行き、天文方でしばらく天体観測の手伝いをしてらしい（測量御用手付と名乗った書類もある）からである。

そしてそのまま江戸にとどまり、翌享和三年二月に第四次測量の正式隊員、小野良助として一行に参加した。この時すでに四〇歳で、後に述べるように、すでに和算で名をなしていたようである。

特に目立った記載がないから、無難に任務を果たしたのであろう。

この回に糸魚川事件が起こった。高橋至時の譴責書にたいして、忠敬が帰りの道中で書き上げ、江戸についてすぐ提出した弁明書「糸魚川一件巨細書」に、一ヶ所だけ小野栄重が出てくる。「相馬宿ノ村津大兄・板鼻宿ノ小野良助兩人ハ、実鉢（真面目で正直）ニテ、威張ることなく「身元相応ニ仕候間、各用意金銀モ持参仕候」つまり自分で

費用を持参した。と書いてあるから、天文方の雇でなく、志願して自費で参加したらしい。学問のための参加であったことが分かる。

この回の帰途も高崎を通ったので、小野はそこで一行と別れ板鼻へ帰ったらしい。江戸着の名簿の中に名前がないからである。

それ以後小野栄重は、弟子の教育に本格的に取り組み、自らの研究にも力を注いだ。天保二（一八三一）年正月六九歳で亡くなるまでの三〇年間に、多くの著作を残しかつ有力な数学者を育てた。

彼は文政五（一八二二）年「星測量地録」を、翌年「弧背真術弁解」などを著し、西洋三角法に関する研究を発表した。伊能測量の一員として、行動を共にしたことに依るところが大きかったのだろう。隊員には、勉強のための自費参加した人もいたのである。

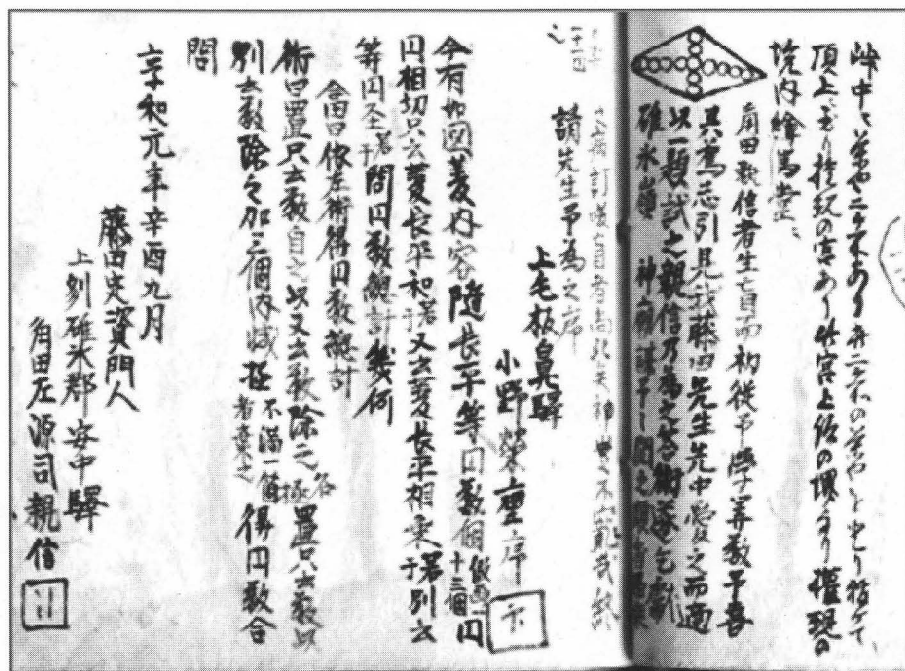
山口和の『道中日記』には、次のようなかたちで登場する。

先ず、七月二二日に江戸を出発した山口和は、二六日に上・信州の境にある碓井峠の権現（熊野神社カ）の絵馬堂で、下記のような算額を見て、写しを取っている。

これは小野栄重の門人で碓氷郡安中駅の角田親信という人が奉納した算額で、前の部分に小野の書いた序文がついている。序によれば、角田親信は盲人で、初め小野自身が教えていたが、その篤志を喜び、江戸の藤田貞資に紹介して入門させたものであるらしい。小野は熱心で、面倒見の良い先生であつたようだ。この算額が奉納されたのは、小野の測量参加の二年前ということになる。この算額は今は失われ、山口の写しによってのみ後世に伝えられた。

また、麻疹から回復して、忠敬一行とともに佐渡の相川に渡った小野は、佐渡奉行所隣の天神社に奉納されていた「伏見孫吉の算額」を写して帰って来た。これに解を付けたものが、小野の稿本『算額解』（門人の子孫、中曽根家蔵）に載せてあるそうである。

四〇歳での参加であり、すでにその時和算の大家として名の通った人であつた。忠敬がこのことに何も触れていないのはどうしてなのか分からない。



山口和『道中日記』小野栄重の序がついた問題

文化七年に小野栄重門人が奉納した算額が、高崎の八幡神社に現存しているが、全六問を一举に掲げた大きなものであり、県指定の重要な文化財である。

天保二（一八三一）年六八歳で亡くなった小野栄重の墓も、県指定の史跡に指定されている。



県指定史跡・群馬県安中市板鼻・南窓寺

登場人物が多く年代も前後しているので、関連年表を付録とした。

（終わり）

（あんどろ ゆきこ）「伊能忠敬文書目録」編者（

付表

享和〇三年 1803

二月 第四次測量出発。伊能秀蔵・小野栄重、参加。
五月 忠敬一行、能登への途中敦賀を北上。郷方支配役人増田友右衛門、案内。小野栄重外大勢麻疹になる。秀蔵、和算の問題を現地の人に見せる。

八月 測量一行佐渡へ渡海。小野栄重、佐渡で、伏見孫吉の算額を写す。

十月 帰路高崎城下で小野栄重、一行と別れて帰郷。以後上州で多くの門人を育てる。

文化一四年 1817 四月 山口和、第一回遊歴（利根川下流域）。

文政〇元年 1818 四月 伊能忠敬、没。

文政〇三年 1820 七月 山口和、碓氷峠から軽井沢へ。絵馬堂で小野栄重の序文付きの、角田親信の算額を写す。

文政〇四年 1821 七月 伊能図上呈。

十月 山口和、敦賀で伊能秀蔵の問題に出会う。小野栄重、「星測量地録」を著す。

文政〇五年 1822 十月 山口、全六回の遊歴の旅を終える。

文政一一年 1828 十月 小野栄重、没。

天保〇二年 1831 十月 伊能秀蔵、没。

天保〇九年 1838 十月 山口和、没。

嘉永〇三年 1850

参考文献

* 『和算家・山口和の「道中日記」』 佐藤健一 外 研成社

* 『和算家の旅日記』 佐藤健一 時事通信社

* 『伊能忠敬測量日記』 千葉県史料 近世編

* www.itsquare.co.jp/koukisin/kazu/index.html 「数楽研究所」

伊能忠敬の測量之碑第一号

忠敬の生存中に葛西昌丕^{かさいまさひろ}建立

佐久間 達夫

平成十一年の四月、読売新聞社大船渡支局の名村栄治氏が拙宅を訪ねてきた。用件は、「岩手県釜石市唐丹に『伊能忠敬の測量之碑』と『星座石』が建立されているので、建立者の葛西昌丕と伊能忠敬の関係を調べにきました」とのことであつた。

筆者は、唐丹の星座石と伊能忠敬の測量之碑については、『伊能忠敬の科学的業績』保柳睦美編著（古今書院）のなかに唐丹の碑のことが記してあつたので概略は知っていたが、詳細は知らなかつた。

早速「測量日記」を繙^{ひもと}くとして、唐丹村測量の条を調べてみた。

資料一 第二次伊豆以北太平洋岸測量日記 佐久間達夫校訂

・享和元年九月二十三日

越喜来村^{こきき}村^{むら}出立。手分、郡蔵（平山）、秀蔵（伊能）、は朝早く七ツ半出立。我等（忠敬）、宗平（平山）、慶助（尾形）は六ツ後に立。吉浜村、唐丹村、唐丹村の内大石浜より船にて引縄測る。是を終とす。七ツ頃に着。止宿西村善太郎、肝入周蔵。

・九月二十四日

前夜より風雨、今四ツ頃に至止む。逗留。午後より晴る。夜測量。気仙郡大肝入より高田村検断忠兵衛、浜に付添案内。此所に至り南部領大槌町役人と対談し、是迄仙台領の止宿首尾合村々浜々役人案

内、大肝入よりその支配の手配り、肝入検断付添の儀、領主より村触、並に難所道繕等迄委細に通達す。然る所、南部領には公儀触は勿論、領主より此度の御用触無之由に付、急に大槌支配の南部役人へ申遣し候よし。それより海辺村々掛役人へ大槌町支配より申合、その支配の間、村役人を別に一兩人宛付添、止宿人足の儀執斗ける。仙台領内案内忠兵衛、並に唐丹浜の役人よりかけ合なくば、南部領にては止宿等の差支は無覺束候。

唐丹より平田村山越。此間仙台領、南部領界。是迄気仙郡、是より閑伊郡、此界より大槌町支配付添案内、佐助、清助なり。村々役人送迎は同前。

・九月二十五日

朝六ツ後唐丹浜出立。

※注釈

・唐丹村 忠敬先生日記四 伊能忠敬記念館所蔵。

高 永三十四貫八百四十二文。

家数二百六十四軒。 内二十七軒大石浜、

二十二軒荒海山根、 七十軒小白浜、

二十四軒山谷ノ山根、 十三軒片岸山根、

二十一軒華露辺浜、 八十七軒本唐丹。

・北極高度 雜録「子午線一度長計算」享和元年測量

伊能忠敬記念館所蔵。

越喜来 北極高度 三九度六分三〇秒

唐丹 北極高度 三九度十二分

大槌 北極高度 三九度二十一分

伊能忠敬測量隊が唐丹村を測量したのは、第二次測量の途次である。第二次測量は、享和元年四月二日、江戸を出立して、まず東京湾を西に向かい、三浦半島、伊豆東海岸を経て伊豆の下田に至る。ここから伊豆の西海岸を北上して沼津へ出て、東海道を東へ進み、いったん江戸に帰る。

続いて六月十九日に江戸を再出発し、房総半島を一周して鹿島灘を北上して、小名浜、石巻、気仙沼と測進し、享和元年九月二十三日の七ツ頃、唐丹村の止宿に着。

翌二十四日は、午前中は雨が降ったが午後は止み、夜、恒星の北極出地度を測る。

この後、太平洋岸を尻谷岬まで測進し、ここから下北半島を一周して野辺地に至り、青森を経て、十一月三日に三厩に達した。

帰路は、第一次測量で測量した奥州街道を測量しながら十二月七日に江戸に帰着する。

「測量日記」には、伊能忠敬が唐丹村で二泊三日を過ごしたが、葛西昌丕と会ったことは記述されていない。そこで忠敬が測量中に記した「忠敬先生日記」の同日付の内容も調べてみた。しかし、そこにも忠敬が葛西と接触したことは記されていないかった。

この後、忠敬の測量の方法や唐丹の測量之碑、星座石などについて話し合い、名村氏は帰路についた。

筆者は、その後、星座石と測量之碑について調べてみた。

○ 唐丹の碑

唐丹村（現岩手県釜石市唐丹町）の星座石と測量之碑は、地元の人々の話によると、もとは白岬地区の海岸近くの葛西昌丕の隠居跡にあったが、大正から昭和の初め頃、測量之碑は本郷地区に移され、星座石は唐丹小学校の玄関脇に移動したとのことである（「読売新聞岩手版・唐丹之碑」^{いしづみ} 名村栄治記）。

● 星座石

地元の人々が「ヒドケイ石」と呼ぶ星座石は、楕円形の置き石（現在の呼称・星座石）で、中央に円があり、そのなかに「北極出地三十九度十二分」の文字が刻まれ、縁の周囲には黄道十二宮（西洋名の訳）と中国の十二次の名が交互にしている。

「北極出地三十九度十二分」は、唐丹の緯度である。「伊能忠敬測量日記」の九月二十四日の条に「夜測量」と記述しており、これは天体測量（恒星の位置測定）をさしている。

・黄道十二宮

太陽のまわりの地球の公転軌道面を黄道面といい、黄道面が地球と交わって作る大円を「黄道」という。

地球から見れば、太陽は恒星の間をぬって黄道上を西から東へ一日約一度ずつ動いて一年で一周する。黄道は、天の赤道と二点で交わる。太陽が天球の南半球から北半球へ通過する天球上の点を春分点といい、北半球から南半球に移る点が秋分点である。

黄道をはさんで南北九度ずつ幅をとった帯を獣帯といい、この帯を春分点から三〇度ずつ等分したそれぞれのものが「黄道十二宮」である。この十二宮の名称に黄道に沿った十二の星座名が当てられている。

黄道〇度、すなわち春分点から三十度までを白羊宮（星座名おひつじ座）とよぶ。以下順に金牛宮（おうし座）、陰陽宮・双子宮（ふたご座）巨蟹宮（かに座）、獅子宮（しし座）、雙女宮・処女宮（おとめ座）、天秤宮（てんびん座）、天蝸宮（さそり座）、人馬宮（いて座）、磨羯宮（やぎ座）、宝瓶宮（みずがめ座）、雙魚宮（うお座）となる。

しかし、ギリシア時代には、これらの宮と星座は対応した位置にあったが、歳差のために春分点、したがって白羊宮は移動して、現在ではうお座になる。同様にその他の宮と星座の対応も当然ずれている。太陽は、十二宮の一つを一月ごとに通過していくのである（『暦と時の事典』内田正男著）。

・十二次

中国の戦国時代（前四〇三〜前二二一）の頃、観測によって木星の公転周期（太陽をまわる対恒星の平均周期）が十二年であることが発見された。現在知られている正しい値は十一・八六二年である。この周期が十二年であると考えていた当時、歳星（木星）の位置を表すのに赤道を十二の部分に分け「十二次」を名づけた。

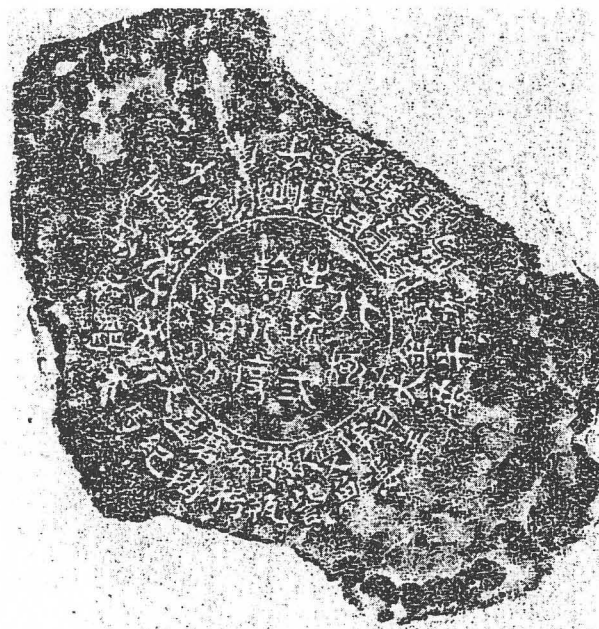
十二次と二十八宿の関係は次のようになる。かつこの中は十二次に相当する位置の二十八宿である。

寿星（軫・角・亢・氐）、大火（氐・房・心・尾）、析木（尾・箕・斗）、星紀（斗・牛・女）、玄枵（女・虚・危）、娵訾（危・室・壁・奎）、降婁（奎・婁・胃）、大梁（胃・昂・畢）、実沈（畢・觜・参・井）、鶉首（井・鬼・柳）、鶉火（柳・星・張）、鶉尾（張・翼・軫）。

この十二次を用い、歳星（木星）の所在する次によって年々の歳の名とした。例えば歳在寿星（歳星が寿星に在る）とか、歳在大火と記したのである（『暦と時の事典』内田正男著）。

資料二 星座石・測量之碑

● 星座石



中央

円の周囲

北極	白羊	大梁	金牛	実沈	陰陽	鶉首
出地三	巨蟹	鶉火	獅子	鶉尾	雙女	寿星
拾九度	天秤	大火	点蠟	析木	人馬	星紀
十式分	磨羯	玄枵	宝瓶	娵訾	雙魚	降婁

● 測量之碑



□ 測量之碑読み下し文

天蝸

陸奥州気仙郡唐丹村測量之碑記

さきの歳、伊能勘解由、命を蒙りて、諸州を経歴し、北極出地の度数を測量す。越えて、享和元年辛酉秋、九月二十四日、次を以て我郷の測定に及び、三十九度一十二分となす。けだし測量の法、古は疎にて今密也。慶長之初め欧邏巴（ヨーロッパ）の商客新製測器を船載し、我方これを補い益々精し。測量の法これにて始めて明るし。ひそかに思えば、天道幽玄、究知すべからず。

もし西洋の説に拠らば、則ちまたいわゆる地球の微動なるものあらざらんか。

請い願わくば、後世の諸彦、あるいは其の異同を知らんことを。
文化十一年甲戌秋月

葛西昌丕謹識

※ 注釈

天蝸（てんかつ）

伊能忠敬の唐丹での天測日は、九月二十四日で、太陽暦でいえば十月三十一日になるので、「天蝸」の月にあたる。

諸彦（しよげん）

多くのすぐれた男子・あなた方・諸賢。

爍（しゅう） Ⅱ 秋

陰暦では、七・八・九月、太陽暦では九・十・十一月

天蝸

陸奥 仙気 州 仙郡 唐丹 村 測量之 碑記

曩歳伊能勘解由蒙 命経歴諸州測量北極出地度数越享和元年辛酉秋九月二十四日以次及我郷測定為三十九度一十二分蓋測量之法古疎而今密也慶長之初欧邏巴之商客船載新製測器我方補之益精測量之法於是乎始明矣竊以天道幽玄不可究知若據西洋之說則復不有所謂地球微動者乎請願後世諸彦或知其異同矣

文化十一年甲戌爍月

葛西昌丕謹識

微動（びどう）

地球の歳差（自転している物体の回転軸が円をえがくように振れる現象）か、あるいは章動（惑星の自転軸に見られる微小な運動の一種）か。

● 伊能忠敬の測量之碑

葛西昌丕は、伊能忠敬の事業をいち早く評価し、忠敬が唐丹村を測量して十二年後の文化十一年（忠敬七〇歳）に、全国で初めて測量記念碑を建立した。

葛西昌丕は、「読売新聞岩手版・唐丹の碑」（名村栄治記）によると、明和二年（一七六五）に出生。通称を善右衛門、晩年は嘉遜（かとん）と号した。天文、暦学のほか、国学や書道にも通じ、天保大飢饉の際は、私財を投じて道路工事を行って貧民救済にあたったという。天保七年（一八三六）七十二歳で没する。

名村氏は、平成十一年五月一日から五回に分けて、読売新聞岩手版に「唐丹の碑―伊能忠敬と葛西昌丕」というタイトルで、星座石と測量記念碑について連載した。（左頁）

それによると、先学者は、次のような疑問点を記し、それぞれに私見をのべている。

- ・ 伊能忠敬と葛西昌丕は、出会っているか。
- ・ 測量の碑の末尾に、「いわゆる地球の微動なるものあらざらんか。請い願わくば、後世の諸彦、あるいは其異同を知らんことを」と刻字されているが、「地球の微動」の文言は何を意味するか。
- ・ 葛西昌丕が、最新の天文学知識を知っていたとすれば、それをどこで学んだか。

葛西昌丕が、星座石に刻字した唐丹の北極出地度（緯度）の、三十九度十二分は、伊能忠敬が享和元年に伊豆国以北から陸奥国までの六十五箇所で測定した「子午線一度の長さ計算（伊能忠敬記念館所蔵）のなかの唐丹の北極高度の測定値と一致している。また、寛政十二年に東都（江戸）から蝦夷地までの北極出地度の記録（寛政十二年測量小図の余白記載の付表）のなかの「水沢」の位置も、三十九度十二分と記されている。

なお、伊能忠敬研究会の会員で、『伊能測量隊、東日本をゆく』の著者・渡部健三氏は、平成十三年のとある日、拙宅にお出でになり、静かな口調で「伊能忠敬が東日本を測量したことを記述した既刊図書が数少ないので、書いてみたい」と、話された。そして、翌年四月八日「著書出版の報告と御礼」の挨拶状と図書が送付されてきた。『伊能測量隊、東日本をゆく』の巻末には、「唐丹の測量之碑」と「星座石」について詳細に記されていた。

その後、渡部健三氏が死去されたことを「伊能忠敬研究会誌」で知り、しばしの間、拙宅にお出でになったときの様子を思い出していた。

（さくま たつお・伊能忠敬研究家）



1999年(平成11年)5月2日(日曜日)

〔調査報告〕



伊能忠敬が舟から測量をして距離をはかった唐丹湾

唐丹の碑

伊能忠敬と葛西昌丕

□ ② □

謎深まる忠敬との出会い

伊能忠敬が舟から測量をして距離をはかった唐丹湾

伊能忠敬が舟から測量をして距離をはかった唐丹湾

伊能忠敬が舟から測量をして距離をはかった唐丹湾

伊能忠敬が舟から測量をして距離をはかった唐丹湾

17年間に渡る測量の旅

伊能忠敬が舟から測量をして距離をはかった唐丹湾

伊能忠敬が舟から測量をして距離をはかった唐丹湾

舟で縄引き距離測る／観測場所は西村家？

伊能忠敬が舟から測量をして距離をはかった唐丹湾

伊能忠敬が舟から測量をして距離をはかった唐丹湾

大谷亮吉と『伊能忠敬』



橋本万平

江戸時代における日本人の科学的能力が卓越していたことを示す一つの例として、伊能忠敬の日本地図の作製がある。その優秀さに感歎したシーボルトが、国禁を犯して海外に持ち出そうとして、いわゆるシーボルト事件を起こしたり、文久元年日本の沿岸を測量しようとした英人が、この地図のある事を知って、最早これ以上測量の必要はないとの歎声を発した程であるから、地図として秀れた業績であった事を知ることができる。

その伊能忠敬の事蹟を、忠敬の筆記をもとにした根本資料によって詳細に研究したのが大谷亮吉であり、その成果が大正六年刊行された『伊能忠敬』という表題の著書である。この本が出版されてから六十年近い年月を経過した現在においても、日本の科学者個人の伝記として、これ以上のものは見られない程精確、浩瀚、然も程度の高い専門的な書物であるから、当時として著者の苦心は想像にあまりあるものがあつたにちがいない。この様な、科学史の分野において、比肩するものが見当たらない程の立派な書籍を出版したのが岩波書店であつたという事は、又驚くべく、注目すべき事実であるといわねばならない。

まだ日本の学術があらゆる方面において黎明期をあまり過ぎない時に、どの様にしてこの様な学問的価値の高い著書が完成されたのか、その動機、経過を知ることが、歴史的にも興味深いことであり、又そ

の本の出版を引受けたのが、恐らく世間にまた名も知られておらず、従つて信用もさしてなかったと思われる岩波書店であつた事は、どの様な経緯があり、この本の完成に岩波書店がどの様に苦勞をしたかという事も、充分調査研究する価値があるといわねばならない。

二

この『伊能忠敬』は理学博士長岡半太郎監修、理学士大谷亮吉編著となつてゐる。長岡半太郎が原子構造のモデルを発表して世界的に有名になつたのは明治三十六年（一九〇三）である。物理学を専攻し、物理学史上に顕著な業績を残している彼は、又西洋の物理学者の伝記にも興味を持ち、『東洋学芸雑誌』を始め多くの雑誌に紹介の文を書いている。彼のこの人間に対する興味と、明治という時代に生れ育つたバック・ボーンとが、日本の過去の文化、日本人の能力の優秀さを実証するために、日本人の科学的な業績を明瞭にしておきたい一念となつて、当時すでに湮滅の恐れがあつた伊能忠敬の事蹟の調査の必要を思ひだしたたのであらう。長岡博士がそれを、帝国学士院の事業として行う事を提案したのが、明治四十一年六月の総会においてであつた。

恐らく当初長岡博士自身もこの仕事に興味を持ち、できれば自分の手でいくらかの研究をしたいと思つたにちがいない。というのは日本の物理学は、明治初期のお備い外人教師の専門分野の関係から、重力測定の様な地球に関係する方面の研究が盛んで、長岡博士にもこの方面の論文が多く関心もあつた。然し物理学者であり大学教授でもあつた長岡博士は、到底忠敬の研究に手を付ける時間的余裕を見出すことができず、最適の協力者として、同じ東大物理科出身の弟子であり、測地に関係した仕事をしてゐた大谷亮吉を選んだのである。この人選は見事に成功した。

三

大谷亮吉は兵庫県姫路市に十数代も続いた旧家の出である。現在の
大谷家の庭に、十個近く積重ねてある珍しい石の分銅が語るように、
家は代々商人として藩の度量衡関係の仕事をつまかされていた。従っ
て亮吉も生れながらにして数字とか計算を好む血が流れていたと見て
よいであろう。明治八年三月十五日の生れである。非常な秀才であつ
たらしく、明治二十年四月、数え年僅か十三歳で、当時の姫路尋常中
学校に入学、同二十五年三月同校を三十二名中八番の成績で卒業、直
に京都の第三高等中学校に入学している。当時の学制として、尋常小
学四年、高等小学四年を卒業して、尋常中学に入学するのが普通であ
つたが、特に優秀な生徒は規定の課程を修了しないで飛越入学が許さ
れていた。寺田寅彦博士は高等三年から中学を受験して見事に落第し
ている。大谷亮吉は普通八年かかる小学校を五年間で終了し、中学に
入学しようとしたが、あまり若年すぎるといので強制的に一年遊ば
された。彼はこの間姫路の地図を書いたといわれている。後年の志向
がすでに現われていておもしろい。

元来姫路の地は、徳川時代薩摩の島津、長州の毛利、その他西国の
有力な外様大名が一朝反旗を翻して東進してきた町、防御の第一線の
要衝として、譜代の酒井氏が城主となり、十五万石の石高に不相応な
巨大な城廓を持つ白鷺城が築かれていた。従って維新に際しては佐幕
方であつたが、革新軍に囲まれ一戦も交えずして軍門に下っている。
そういうことも一つの理由であろうか、明治に入つて軍人とか政界、
経済界ではこれという著名な人物も出ていない。然し、文化人として
は柳田国男兄弟とか三上参次、辻善之助、降つては和辻哲郎等が知ら
れている。これらの人の多くは旧制の姫路中学の出身である。特に三
上は大谷より十二年先輩、辻は一年後輩であり、大谷の『伊能忠敬』

執筆の際には種々の協力を受けた様である。

明治二十五年の秋、姫中から京都の第三高等中学に進学した大谷は、
当時その学校の特殊性から来る学制改革によつて、多くの学友と共に
明治二十七年、三年生の時東京の第一高等中学校に転校、翌二十八
年同校卒業、次いで東京帝国大学の物理科に入学をした。当時の物理科
には二講座があり、山川健次郎と田中館愛橘がそれぞれ教授であつた。
長岡半太郎は助教であり、大谷亮吉との関係はこの時に生じたので
ある。

明治三十一年七月、十一名中の首席で物理科を卒業した大谷は直に
大学院に入学、地球物理学を専攻する事となり、三十三年六月には測
地学委員会重力測定方を嘱託され、長岡半太郎、新城新蔵等と協力、
日本各地の重力の加速度を測定し、いくつかの論文を発表している。

この様な経歴の大谷を、伊能忠敬の事蹟調査の責任者として長岡が
選んだのは当然であろう。明治四十一年六月に長岡が学士院に忠敬の
事蹟の調査を提案し、同年八月一日には早くも大谷亮吉に対して、帝
国学士院伊能忠敬測地事蹟調査を嘱託する辞令が出ている。今までの
経歴と全く異つたこの大きな仕事を引受けた大谷の心境や事情は、明
治三十六年頃から四十一年までの数年間の大谷の動静と共にはつきり
わからない。明治四十一年八月、大谷はこの仕事を委託されると直に
精力的な活動を開始した。最初に忠敬の遺著、遺品の調査を千葉県佐
原の旧伊能家で行つた。この時は当時の佐原中学校長、海塩錦衛が協
力している。越えて明治四十二年となると、大体の研究の骨組ができ
たらしく、同年五月五日の『東洋学芸雑誌』に「伊能忠敬測地事蹟」
として、調査の概況が発表されている。その文章の始めは、

帝国学士院ニ於テハ伊能忠敬氏ノ測地事蹟ニ関シ大ニ調査セラルル
所ナルガ現下ニ於ケル其調査概況は左ノ如シ。編者識

となっている。これは恐らく大谷の手になり長岡が検閲したものと思われる。その後も伊能忠敬関係の文書には、大谷が草稿を作り長岡が朱批を入れたものが残っている。特に膨大な本文原稿も同様であったらしいが、それは事情があつて現在正しい持ち主である大谷家の手を離れていることである。

一応調査の骨子が作られた後、大谷は忠敬の作業を詳細に分析研究あるいは新資料の発見に鑢骨の努力をして原稿が完成したのは、仕事に着手してからあしかけ九年が経過した大正五年の春の事であつた。長い苦しい努力の歲月であつた。

四

原稿が完成すると、これを活字にするのが次の当然の作業である。当時にあつては、この様な種類の本は商品としての採算がとれる筈はない。そこで財閥三井家より二千円の寄贈を得て出版することとなつた。その出版店として指定されたのが岩波書店である。岩波書店の歴史は安倍能成の『岩波茂雄伝』及び小林勇の『惜櫟莊主人』及び『岩波書店五十年』に詳しく出ているが、それによると岩波書店の出版店としての出発は、一応大正三年九月二十日の漱石の『心』の出版の時となつてゐる。岩波書店が学問社会に名を知られる様になつた最初の機会であつた『哲学叢書』の第二編の刊行が大正四年十月である。この様な創業の時代から考えると、岩波書店に『伊能忠敬』の出版を頼むというのは、余程の冒険であり、岩波を堅く信頼していた人の強い推薦があつたと見たい。然し岩波書店の方には全く当時の記録はない様であるし、関係者にも何等の記憶も残っていないらしい。不思議な感じがする。恐らく単なる頼まれた仕事であり、出版だけを引受けた為であつたかも知れないが、これだけ日本の学界に大きな貢献をして

いる本であるから、引受ける時もそれだけの価値を認めて出版した筈であるが、誰もあまり関心を持つていないのは何故であらう。いずれにしても岩波書店にこの記録がない以上、どこか他にそれを求めねばならない。

五

差当り考えられるのは狩野亨吉と寺田寅彦の二人である。両者ともに夏目漱石を通じて岩波との関係を持つたのであるが、狩野亨吉は岩波茂雄の一高在学中の校長でもあつた。そして岩波はその後何かこの旧校長の世話を見ている。また狩野亨吉については『伊能忠敬』の序文で長岡半太郎は

文学博士狩野亨吉君は之（稿本）を閲読して有益なる助言を与へられたり

と書いているので、何か関係がありそうである。然し自らを語る事の少なかつた狩野亨吉関係の資料の中からは、私はまだ何も見出す事ができない。岩波は、狩野亨吉に本の題字をよく書いてもらったという事であるが、『伊能忠敬』に書かれている表題の文字は、大谷亮吉の筆である事は、彼の履歷書の筆跡と照し合わせてもわかるし、現在（昭和四十七年七月二十三日）の亮吉の老夫人の言葉でもあつた。結局狩野亨吉が岩波書店との間に立つたことはなかつたと見ねばならない様である。

漱石の弟子であり地球物理学の研究者である寺田寅彦が、もしこの『伊能忠敬』の出版に関係を持つ機会があるとすると、彼は地理学者伊能忠敬その人に関心を持った事以外には考えられない。同じ東大物理出身であり、同じ大学院に籍を置いた寅彦ではあるが、大谷より五年後輩であり、時代がずれているので、相識であつたとは思われるが、

どの程度のつき合いであるかわからない。いずれにせよあまり親しくはしていなかった様であるから、寅彦の手を通しての岩波への紹介ではなさそうである。結局は長岡半太郎が直接岩波書店を指定したと見るより他はない。然し長岡と岩波はそれ程深い交渉があったとは考えられないので、矢張り誰かの紹介があつたのではないかという疑問が残るのが拭い去れない。今の所はそれが誰であるかわからない。現在長岡関係の豊富な資料が、東京科学博物館に保管されているとの事であるから、彼の日記等を丹念に調べると、何か手がかりが得られるかも知れない。

六

いずれにしても『伊能忠敬』は、岩波書店から大正六年三月三十日の日付で発行された。四六倍判で本文七六六ページ、一五ページにわたる年譜、系図をつけ良質紙を使った堂々たる著書である。折しも大正六年は、伊能忠敬の百年忌に当り、出版の直後の四月十三日の忌日には墓所である浅草の源空寺で法要が行われ、墓前に印刷が出来上がったばかりの新らしい『伊能忠敬』が供えられたという。或はこの日に間に合う様に出版の日がきめられた事と考えられる。その法要には忠敬の遺族の他に、帝国学士院から菊池大麓院長、穂積、古市両部長、三上、長岡両博士及び著者大谷亮吉が参列している。学士院としてもこの仕事に力を入れた事が知られるのである、尚三上参次は大谷にとつて姫路中学の先輩であり、この著書の稿本を閲読した人である。これ程関係者が関心を持った法要であるから、当然岩波書店の方からも誰かが参列したにちがいないと思われるが、書店の方には記録は全くないとの事である。

七

岩波発行雑誌「思潮」の創刊号(大正六年五月一日)の裏表紙に、『伊能忠敬』の広告が出ている。広告文は恐らく岩波茂雄の筆であろう。大体は同書の長岡半太郎の序文によっているが、大谷亮吉の事を星暦研究者とだけ紹介しているのは見当違いで、大谷を知らない人の手になったと考えてよい。この広告には「実価四円で広く天下に頒たんとす」とあるが、私の見た書物には定価が印刷されていない。もともと市販を目的としたものではなかったのである。著者大谷は自分の子供達に、それぞれこの本と自分の写真とを与えたという事である。いかに心血をそそぎ、精魂を打込んだ本であるかを知ることができる。

八

大谷は『伊能忠敬』を完成させた後、文部省に入って教科書用の図書の調査とか、作製に従事した。数年後の大正十年京大理学部講師となり、続いて新設大阪高等学校の教授となった。京都大学の方は兼任教授として、地球物理学の講座を分担していたが、比較的若く昭和九年三月二十六日、数え年六十歳で現職のまま世を去った。墓は郷里姫路市の名古山墓地公園の、書写山をのぞむ景勝の場所に、十基に近い先祖や近親の墓と並んで葬られている。

関係者はすでに逝き記録は失われたとはいえ、『伊能忠敬』の本は今に残り、日本科学史の一つの金字塔として、不朽の価値をいつまでも輝やかしているのである。

(はしもと まんべい・神戸大学教授)

◇本稿は岩波書店の『図書』第二八三号(一九七三年三月号)に掲載された記事を岩波書店にお願いして転載したものです。(編集部)◇

九州支部だより

Ⅱ名護屋城博物館で学ぶⅡ

「慶長肥前国絵図」「測量方御用諸事覚帳」を見学

馬場 良平

佐賀県立名護屋城博物館は、豊臣秀吉の明国征服という大きな野望のなかで、最前基地として築かれた肥前名護屋城跡にある博物館で、文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）を侵略戦争と位置づけ、その反省のうえに立つて、日本列島と朝鮮半島との長い交流の歴史をたどり、今後の双方の交流・友好の推進拠点となることを目指して事業を展開しています。

この名護屋城博物館では毎年「なごや歴史講座」や「特別史跡『名護屋城跡並びに陣跡』史跡探訪会」などが行われ、多くの歴史ファンの学びの場所ともなっています。

また、名護屋城博物館と云えば、昨年、唐津藩の「船手」史料が確認され、その中には伊能忠敬が唐津の海岸線を測量した際に記録された「測量方御用諸事覚帳」が保管されているところでもあります。

その名護屋城博物館第七六回目の「なごや歴史講座」は「慶長肥前国絵図を読み解く」と題したテーマで「絵地図でタイムトラベル―館蔵地図総覧―」というテーマ展と時をあわせて開講されることになっていました。この機会に「慶長肥前国絵図」と合わせて「測量方御用諸事覚帳」を見せてもらえないかと相談したところ、可能だとの返事をいただき、石川支部長はじめ数名にお誘

いの連絡を入れ七名の参加が得られ、非公式ながら九州支部のミニ研修会の様相となった次第です。

平成二十二年二月一日（日）JR唐津駅で福岡方面から電車であられた石川清一支部長、野田茂生氏、國重正樹氏を迎え、わが車に同乗の佐賀の松尾紀成氏の五名は、途中、名護屋湾の入り江近くの海浜レストランで呼子名物「いかの活きづくり」で舌鼓をし、会場

の名護屋城博物館へ向かいました。会場には、別途、福岡から駆けつけられた河島悦子氏や地元佐賀の宮地滋氏と一緒に、会場の名護屋城博物館ホールに入りました。

当日の研修内容について簡単に報告いたします。

一、「慶長肥前国絵図」について

講師は名護屋城博物館・浦川和也学芸員が務められ、まず、名護屋城博物館が平成一九年（二〇〇七年）十一月に入手した「肥前国大絵図」と題された、



名護屋城博物館「慶長肥前国絵図」の前にて

（左から）松尾（紀） 宮地 國重 馬場 石川 河島 野田（敬称略）

いわゆる「慶長肥前国絵図（名博本）」がパワーポイントによって映し出され、その入手経緯についての説明から始まり、江戸幕府の国絵図事業が土地の台帳である「郷帳」と国単位の国郡図である「国絵図」を幕府文庫（官庫）に収納する事業であり、慶長・寛永（巡見使による）、正保・元禄、天保の五回実施されたこと、それぞれの時代の国絵図事業の作成基準や絵図の様式、内容、特徴といったものについての説明がなされました。幕府へ提出された慶長国絵図の正図は、明暦の大火（一六五七年）で焼失したと思われ、一切現存しないといわれています。現存する慶長国絵図は、各地に残る控図や後世の写図などがわずかに伝世したものとされ、肥前・筑前等十一国一島の控図や後世の写図・十四図と同館が入手した「慶長肥前国絵図（名博本）」が一举に映し出された時には、大きな興奮を覚えました。

「慶長肥前国絵図」については、平戸・松浦史料博物館所蔵（A本）、佐賀・鍋島報効会所蔵（B本）、（B本）の写しである（C本）が把握されているとされ、このほかに武雄市立図書館・歴史資料館（エポカル武雄）には鍋島報効会所蔵（B本）の写しとされる「慶長肥前国絵図」があり、この名護屋城博物館所蔵の「慶長肥前国絵図（名博本）」を含めると五点が存在することになります。なぜ肥前国に多いのかという疑問に対しては、天保国絵図事業における幕府の「実高」記載要請や、変地等の照会に関し、諸藩の「困惑した」状況が契機になったものと思われると浦川和也学芸員は話されています。

二、テーマ展「絵地図でタイムトラベル」

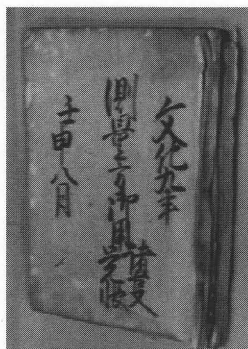
名護屋城博物館ホールでの講座の後、展示室で行われているテーマ展会場へ移動し、浦川和也学芸員の説明により館内を見て回りました。「館蔵地図総覧」のサブタイトルのとおり、館蔵資料の中からさまざまな分野の地図・図面類四十二点を集めたテーマ展で、日本列島と朝鮮半島の交流史を大きな柱に掲

げ、「Ⅰ 世界から見た日本」「Ⅱ 名護屋・唐津・肥前」「Ⅲ 通信使が通った道」「Ⅳ 地図で見る朝鮮半島」の各テーマごとに展示・紹介されていました。

やはり、ここでの庄巻は淡彩・墨書の掛幅「慶長肥前国絵図」（縦231.5cm、横245.6cm）でありました。唐津藩が幕府からの照会に対する回答等のために、天保八年（一八三七）前後に大村藩から借り受けて写したものと推定される「慶長肥前国絵図」は、小城（おき）以東六郡の「郡付」（郡名・石高・面積・年貢高・村数）と「村形」（村名・石高）が北側（唐津藩側）から見て読みやすい向きに書かれています。

三、「測量方御用諸事覚帳」

唐津藩の「船手」史料が確認され、伊能忠敬の測量記録である「測量方御用諸事覚帳」が発見されたことは、本会報二〇〇八年第五三号で掲載されましたので、詳細情報については、



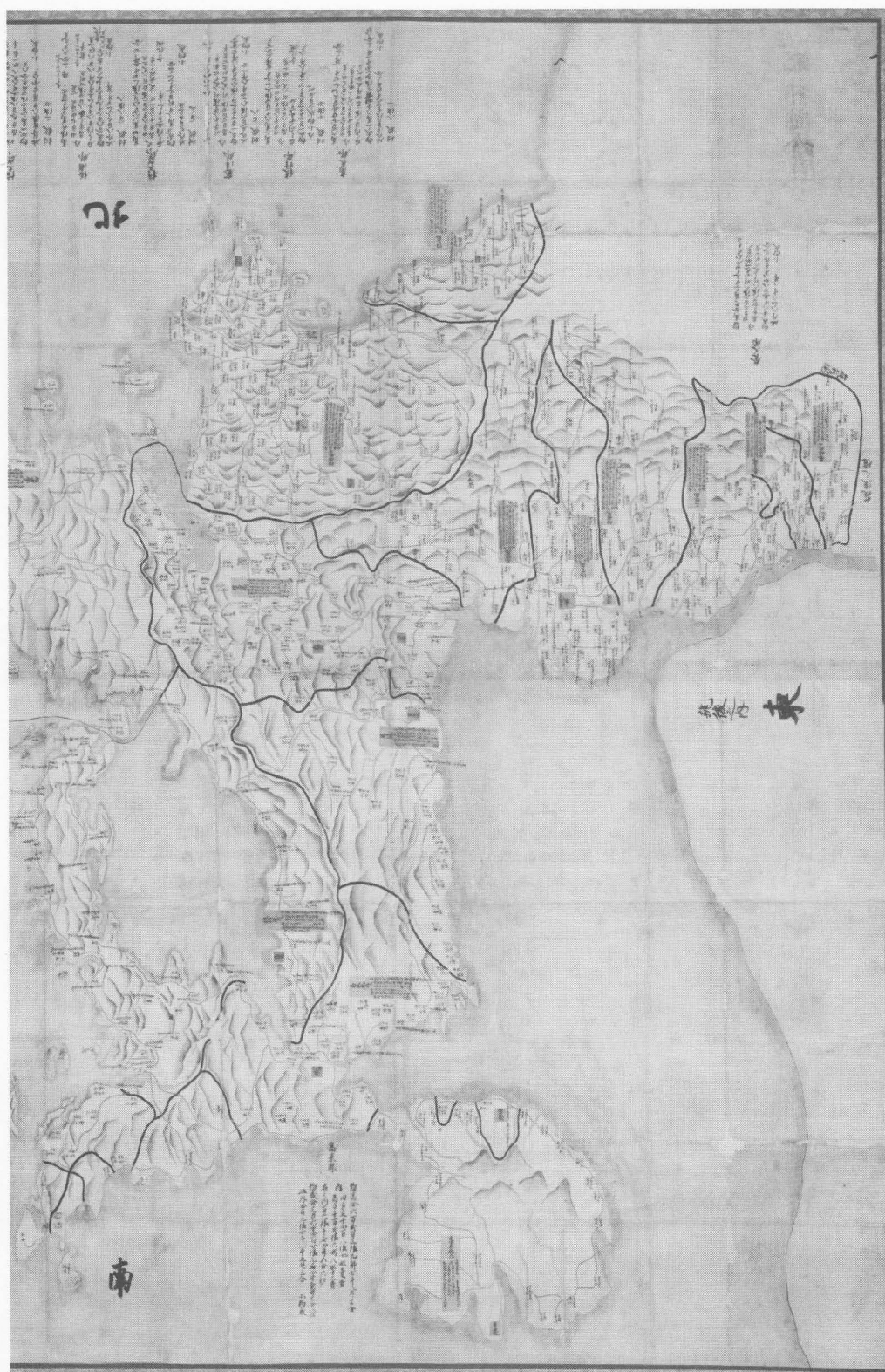
船手史料から「測量方御用諸事覚帳」

すでに「九州大学デジタルアーカイブ」を検索して、原文を解読された方もいらっしゃると思いますが、今回、名護屋城博物館の西田和己学芸課長や浦川和也学芸員、それに「船手」史料の確認作業を担当された久野哲矢学芸員のご配慮により、同館学芸員室において伊能忠敬研究会九州支部七名のために現物を見せていただくことが出来ました。

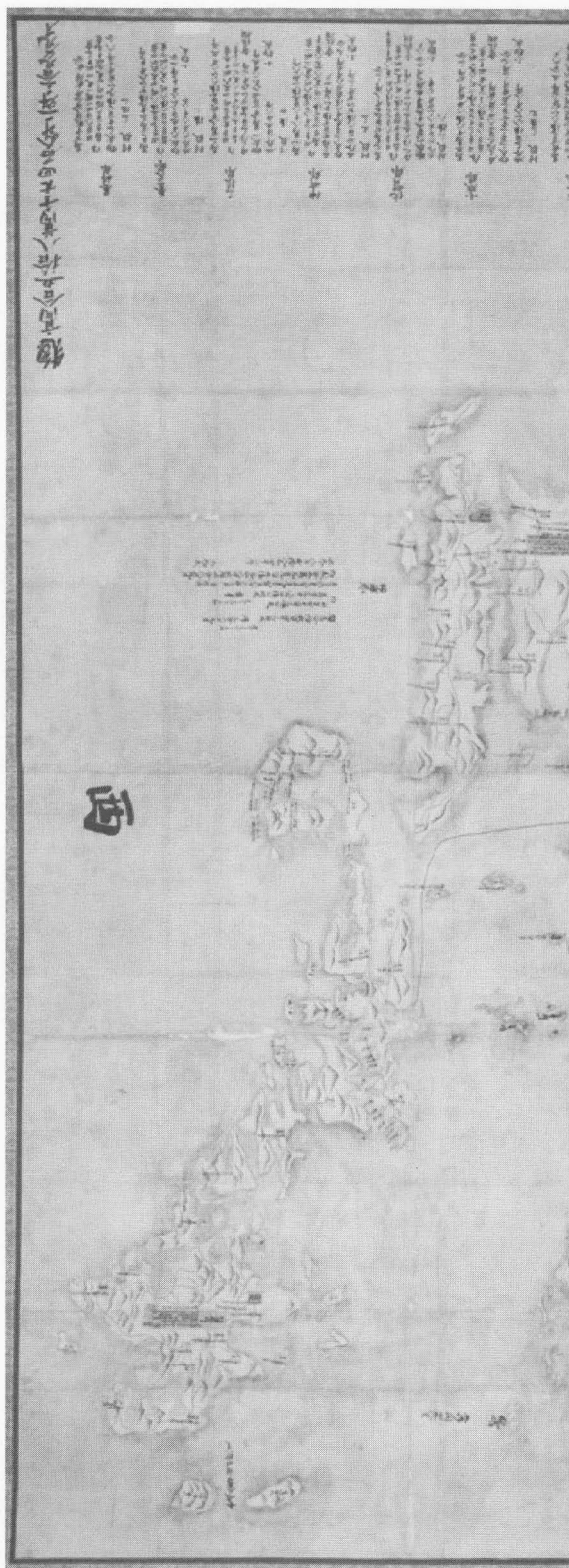
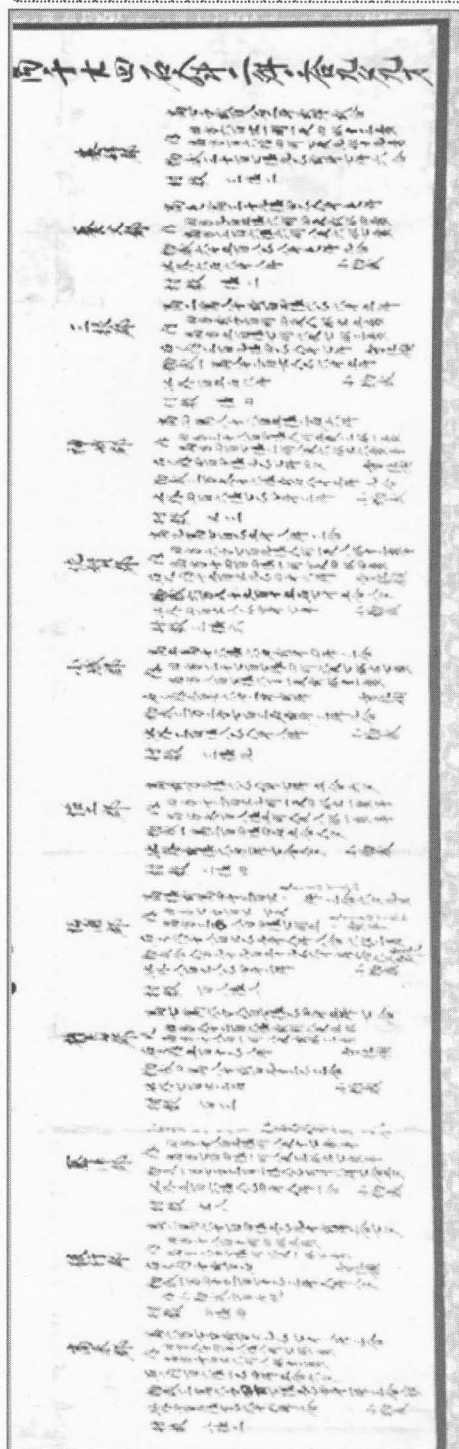
「文化九年（一八二二年）壬申八月 測量方御用諸事覚帳」と表紙に記された、測量方の伊能忠敬一行が唐津領内に入り測量するにあたって、その対応を記録したこの文書を参加された研究会会員が食い入るように覗かれ、ページを捲っては「右進丸・・・伊能勘解由殿や」「左進丸・・・坂部貞兵衛殿」

『慶長肥前国絵図』

佐賀県立名護屋城博物館蔵



「郡付」「村形」の記述(拡大)



といった文字を見つけると大きなため息と感動による笑みがこぼれていました。いち早く「測量方御用諸事覚帳」を解読された河島悦子氏や担当の久野哲矢芸員からは、文書から読みとれた「八月はやはり暑かったのか、中尾家（呼子鯨組）から日よけ用の板十五枚を借用した」ことなどエピソードが披露されて貴重な時間があつという間に過ぎてしまいました。

名護屋城博物館玄関前で、浦川和也芸員や久野哲矢芸員の見送りを受けながら、佐賀の宮地滋氏と別れ、福岡組の石川清一支部長、野田茂生氏、國重正樹氏、河島悦子氏と佐賀の松尾紀成氏を乗せたわが車は、上場台地と呼ばれる東松浦半島に繋がる、伊能忠敬一行が測量日記に名古屋街道と記した、いわゆる太閤道を追い求めながら唐津へ向かい、途中、太閤道一里塚に祀られている道祖神を拝み、唐津駅で福岡組と別れました。

今回のミニ研修会に参加された会員皆様からは、この一日の研修が大変充実し、満足出来るものであったとの感想をいただき、名護屋行きを提案した私にとつても有意義で忘れられない一日となりました。

思えば、唐津藩が大村藩から借り受けて写したとされる名護屋城博物館所蔵の「慶長肥前国絵図」

の模写された時期が、天保八年（一八三七年）前後と推定されていますが、これより以前文化九年（一八二二年）八月から九月にかけて伊能忠敬測量隊一行が唐津藩領内を測量しています。幕府からの照



（上）担当の久野哲矢芸員

（下）史料の現物を前に感動

会に対する回答のために国絵図の写しを求めたのであれば、当然、伊能忠敬の実測図に深い関心を持ったことが窺い知れます。当研究会名誉代表渡辺一郎氏が書かれた『伊能忠敬の歩いた日本』の中で、――西九州の諸藩、伊能図に関心をもつ――とあり、「唐津藩も地図仕立てを依頼したらしいことが忠敬の江戸日記から推測される。作られたとしたら、人知れずどこかに保存されているだろう。」とされています。これらを結びつけて考えると、どこからか肥前地方の伊能図が出て来ないかと密かに期待するものです。

折しも「完全復元伊能図全国巡回フロア展」がこの四月よりスタートしました。この機会に、佐賀県において「完全復元伊能図全国巡回フロア展」が開催出来ればと思っています。わが佐賀県には国絵図研究の第一人者である川村博忠氏の若き日に強い衝動を与えた慶長肥前国絵図をはじめ、正保、元禄度の肥前国絵図など数多くの古地図、絵図があります。フロア展会場に伊能大図、中図、小図による日本地図とともに確認されている慶長肥前国絵図などを一堂に集めた古地図、絵図展を企画出来れば最高だと考えるこの頃です。

なお、佐賀県立名護屋城博物館の宮崎博司芸員に画像借用の際に大変お世話になったことを厚く感謝申し上げます。

（ばばりようへい・塚崎・唐津往還を歩く会）

参考資料

- * 第七十六回なごや歴史講座資料『慶長肥前国絵図を読み解く』
- * パンフレット：テーマ展『絵地図でタイムトラベル―館蔵地図総覧―』
- * 『研究紀要第15号』 名護屋城博物館
- * 『国絵図』 川村博忠著 吉川弘文館
- * 『佐賀県立図書館蔵古地図絵図録』 佐賀県史料刊行会
- * 出前講座資料『城下町と船方―船・町・ひと―』
- * 『伊能忠敬の歩いた日本』 渡辺一郎著 筑摩書房

お知らせ

例会報告 (第四回)

■第四回例会(三月例会)三月八日(日)実施(内容は前号で報告済み)
○展示見学「静嘉堂文庫の古典籍 第七回 古地図の楽しみ」伊能図他



東京・世田谷の静嘉堂文庫にて

(後列左から) 宮内 山本 坂本 中川 永野 鈴木 伊能 渡辺
(前列左から) 宮内 島崎 首藤 大庭 新沢 伊能 (敬称略)

↓次回例会のご案内↓ ■第五回例会 (決定次第お知らせ)



会員情報

入会 長谷川貞夫さん(東京都練馬区) **近況** 伊能図完全復元フロア展



が東京・江東区の深川スポーツセンターで始まり、四月十二日に行ってきました。伊能忠敬の復元地図の上を直接歩き、ご子孫にもお会いできました。(文・写真 長谷川さんのブログ「長谷川貞夫の視覚障害とユビキタス」より)

【編集部】長谷川さんは点字ワープロを開発した方。高齢の研究者であり視覚障害者と同じく歩調で歩くことから、伊能忠敬に共感したそうです。

入会 今崎仙也さん(呉市豊町御手洗) **近況** 文化三年、第五次測量の時宿泊された旧柴屋住宅の蔵を「御手洗測量絵図と浦島測量絵図」などの展示会場として開館しました。測量器具等関わりのあるものを展示したく思っております。お借り出来るもの等ありましたらご連絡下さい。

【編集部】今崎さんは昨年研修旅行で御手洗を案内してくださいました。

退会 安達正剛さん(神戸市東灘区) 伊能忠敬については移民船の航海士として海図を担当し、天測、星測をするようになってから興味が出てきました。伊能図がどうしてあんな正確なものが出来たのか、はかり知れませんでした。偶々研究会の存在を知り、渡邊さんが神戸で懇親会に来られた時、入会させていただきました。以来、あらゆる面で親しくご指導をいただき、会員の方々からも会合の際には思いもよらぬ知識を授かりました。今回、退会の止むなき仕儀となりましたが、これで伊能忠敬とのつながりが切れることはありません。会員の皆様には何卒謝意をお伝えいただきたく、これからの研究会の一層のご発展と輝かしい御成果を挙げられるよう心からお祈りしつつ擱筆させていただきます。再拝頓首

【編集部】安達さんは体調等の御事情により残念ながら退会されることになりました。頂戴した長文のお手紙を編集させて頂きました。感謝。



お便りから

■秋間実さん（小平市）元気に生きのびて、なにより書いています。総会を楽しみにしています。会誌、毎号まことにけっこうです。

■石橋輝樹さん（新潟市）毎号充実した会報ありがとうございます。本年度もよろしくお願いたします。

■伊藤栄子さん（東京都練馬区）足の具合が悪くて遠くへは行けませんので失礼しております。皆様の御活躍を祈念しております。

■井上靖子さん（所沢市）毎回充実した内容に敬服しております。高齢にはなかなか暇どりますが楽しみに拝見させて頂いております。

伊能図全国巡回フロア展のご盛会を祈りつつ、編集の皆様の健康を祈っております。

■江口俊子さん（山武市）いつもお世話になっております。わが家で一番恐ろしいものは南風の台風です。昨年五月、収穫前のそら豆の株が台風で全部たおされました。ここ山武横田は九十九里海岸から十三kmですが、塩害に会うこともあります。

■大宮信篤さん（松山市中島）昨年十二月一日は研修旅行で来島いただき伊能御夫妻、渡辺先生他会員の皆様にお会いすること出来て楽しい一日でした。

■小沢健一さん（狭山市）いつもお世話になります。

■河西浩さん（甲府市）55号の星埜由尚先生の

「伊能大図総覧の地名と景観（九）」の中で、大図98号の甲府があり、興味深く読ませていただきました。私の勤務している甲府市立石田小は、御城の西にあり、上石田、下石田、高畑からなります。その地名を全て図面上に確認できました。七次測量の折、伊能隊がまかり通る様を想像しました。

■河崎倫代さん（金沢市）いつもお世話様です。

■河島悦子さん（筑紫野市）「江戸参府ビッグウォーク二〇〇九」日歩協後援 蘭人三名、日本人二名、平戸出立、豊前小倉まで歩く。佐賀県内は会員の馬場氏が勤め、肥前中原で福岡勢と交替、歴史街道歩く会の精鋭達です。日歩協は古道はご存知でなく、蘭人達は往時の道を希望でした。

■神戸利行さん（加東市）三月二七日京都の手伝いをし、鈴木事務局長とも知りあえてすしうれしかったです。（関西支部の皆様、ありがとうございました）

■久保木恒雄さん（柏市）壮健也。

■小滝規子さん（東京都渋谷区）何かとお世話になっております。今後ともよろしくおねがいいたします。

■小林一三さん（新潟市）元気で過ごしています。

■近藤圭二さん（東京都豊島区）他の会の運営で時間をとられ、なかなかこちらのイベントに参加出来ないのが残念です。

■斉藤サダさん（函館市）例会のご様子など、

紙上を通じて拝読しています。皆様の健康を祈念いたします。

■白根貞夫さん（横須賀市）先日、四月一日、深川スポーツセンターで伊能大図展を見ました。幹事の方々の御苦勞を謝します。元気にしています。

■首藤郁夫さん（府中市）科学史学校は本年四月から会場が明治大学秋葉原キャンパスになります。秋葉原駅前の秋葉原ダイビル六階です。五月三〇日には八耳俊文氏による「魯迅と『自然』：上海自然科学研究所をめぐる人々」の講演があります。（地図もあり、省略しました）

■高瀬芳夫さん（千葉県東庄町）会報いつも楽しみにしています。香取神宮の桜もほころんでまいりました。

■辻本元博さん（堺市）「山島方位記」地球惑星科学系の国内、国際学会 地磁気の解析数値を連続して発表中。伊能図英国譲渡の本当の理由についても併行して執筆中です。暫くお待ち下さい。

■西川治さん（多摩市）今年は忠敬翁も年男、わたしも乙丑生まれ。

■平川定美さん（佐世保市）伊能忠敬の佐世保における本陣（泊地）を調べています。

■福田弘行さん（新座市）「本山に誰が植えける花なれや 春こそ手折れ手向けにぞなる」四国第七〇番霊場七宝山本山寺 どうぞお元気に活動を。

■藤岡健夫さん（横浜市）三月五日日立技術士会で「伊能忠敬と方位磁石」の話をしました。

■藤田宏さん（東京都文京区）宏は相変わらず多忙です。教育改革会、数学教育、…。東大大学院入学式の祝詞をお頼まれしたり…。淑子も元気で、少々スポーツジムでの運動が過ぎ、左膝の靭帯損傷。今はおとなしくしております。

■本間昭弘さん（横須賀市）まだ元気で働いています。

■松田昭二さん（京丹後市）復元伊能図おめでと〜ございます。近畿での展示を待っています。

■宮地滋さん（伊万里市）九州支部に於いて前年長崎研修「宝の島 対馬」展に参加出来有難く思っております。今後とも御指導の程よろしく願っています。

■村上昭三さん（船橋市）平成二十二年会費をお送りします。宜しく願います。不二

■山浦佐智代さん（三条市）その節は御世話になりました。ありがとうございます。

■湯尾弘司（泉佐野市）昨年八月結婚して大阪府泉佐野市に引っ越しました。

■横川淳一郎（丹波市）「伊能忠敬研究」五十五号有難うございました。

■吉田正人さん（千葉県一宮町）四月より九十九里海岸近くに引っ越しました。四月一日、五月一日、江戸川大学サテライトセンターで「伊能忠敬と伊能図の秘密」を講義しました。



日々の話題

■新聞記事 『伊能大図フロア展』深川』が開催され、各種メディアで取り上げられました。（四頁以下に掲載された記事を参照ください。）

■TV報道 「江戸参府ビッグウォーク2009年」が五月一二日に東京・日本橋に到着し、新聞やWebニュース等で報道されました。この催しは日蘭通商四百年を記念し、「日本オランダ年2008-2009」の一環としておこなわれたもので、長崎から江戸への一、〇〇〇キロの道を日本とオランダのウォーキング愛好者が歩いて交流しました。本会会員では九州支部の河島悦子さんと馬場良平さんが参加しました。



5月12日長崎から徒歩で「日本橋道路元標」に到着、歓迎を受ける蘭人ら。日蘭通商開始から400年を記念し「江戸参府」を再現（時事通信）

■論文掲載『地図中心』2009年4月号に論文が掲載されました。「伊能忠敬隊の能登測量

―能登半島今昔紀行―河崎倫代さん・「絵葉書の地図コレクション」（連載）鈴木純子さん

■音楽会『オペラ・紫のドレス』（5月6日市川市）で柏木隆雄さん作詞の歌を上演。『鈴木香代子ソプラノコンサート in 飛騨高山／湯山昭の世界・高山の夏』（6月20日高山市）で柏木さん作詞「高山の夏」初演、特別ゲスト。



■ゲーム『伊能忠敬の宝の地図』北総観光連盟（香取市、佐倉市、成田市、東庄町、銚子市）

が主催の宝探しイベント「北総に眠る財宝」がホームページ上で公開されています。無料。

開催期間 6月

1日〜8月31日

問合せ先

水郷佐原観光協会

☎0478-52-6675

○ホームページアドレス

<http://www.akai-tori.com/hokuso/index.html>



■雑誌記事『致知』六月号「第九回 子孫が語る日本の偉人」

「冒険家・探検家」として世に紹介されています。確かに極寒の未開の地を踏査するという行為は、それに相違ありません。しかし、彼をそのような行為に駆り立てたのは、シヤナ事件によって湧き上がってきた思

【一部紹介】林蔵は「冒険家・探検家」として世に紹介されています。確かに極寒の未開の地を踏査するという行為は、それに相違ありません。しかし、彼をそのような行為に駆り立てたのは、シヤナ事件によって湧き上がってきた思

第九回「子孫が語る日本の偉人」



間宮林蔵

間宮正孝

間宮正孝は、父・林蔵の偉業を継ぐべく、幼少から航海に興味を持ち、18歳の若さで、父の足跡を辿るべく、大冒険に出た。その経緯が、本書に詳しく記されている。本書は、林蔵の偉業を継ぐべく、父の足跡を辿るべく、大冒険に出た。その経緯が、本書に詳しく記されている。

い一つ、敵国に対する強烈な「危機感」だったのではないかと、私は思うのです。（中略）外国から国を守るという強い信念を持ち、困難にぶつかりながらも黙々と未開の地の踏査を続けた林蔵。（略）周囲の評価に左右されず、己の信ずる仕事をしっかりと行っていく。地道なことを延々と、着実に続けることが最終的に実を結び、そのことを、林蔵の生涯は教えてくれているように感じます。

お知らせ

■刊行『伊能忠敬の全国測量』（2009年4月1日・伊能忠敬研究会・四八頁）問合せ先・日本写真印刷㈱ ☎075-1823-15151

■国立科学博物館 ☎03・777・8600

◇「企画展 ガリレオの天体観測から400年 宇宙の謎を解き明かす」

2009年5月30日（土）～7月20日（祝）

◇科学史学校「ガリレオ神話を正す」講師・高橋憲一（参加自由・無料・事前申込不要）

2009年6月27日（土）14時～16時

場所・明治大学秋葉原キャンパス（千代田区神田1-18-13 秋葉原ダイビル6階）

問合せ先 ☎03・5209・7848

■神奈川県立歴史博物館 ☎045-1201-0926 横浜市中区南仲通5-60

◇「江戸時代の地図・絵地図」伊能図 他

2009年6月27日（土）～8月9日（日）

■五島美術館 ☎03-3703-0661

◇「松浦家とオランダ残照」平戸市通商400年

2009年5月16日（土）～6月21日（日）

■中近東文化センター ☎0422・32・7111 三鷹市大沢3-10-31

◇「中近東の星座と神話」世界天文年2009

◇『伊能忠敬記念館年報』第10号が発行されました。研究報告『富士山宝永噴火』『幕末明治以降の伊能図の利用と忠敬の評価について』『伊能図のコンパスローズについて』等が掲載されています。

◇『伊能忠敬記念館』第62回収蔵品展 期間 5月26日（火）～7月20日（月） 展示品 伊能大図（東京・神奈川付近）『山島方位記』など

◇第63回収蔵品展 期間 7月22日（水）～9月13日（日） 展示品 伊能大図（静岡・愛知付近）『測量日記』など

■伊能忠敬記念館

☎0478・54・1118



2009「佐原の大祭」ポスター

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行

発表誌 原則として年四回

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地（04年8月事務局が新宿区下宮比町から移転）

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール junko-sz@jcom.home.ne.jp

（07年8月よりアドレスが変わりました）

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定 会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にご一任下さい。手書き、CD、メール添付可。（FD要相談）一頁は二段組31字×26行（400字詰用紙4枚分）、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等（返却します）添付可。話題、情報、近況などのお便りもお待ちしております。

伊能忠敬研究会のホームページ

「伊能忠敬研究会」公式ホームページ

<http://inoh-tadaka.org/>（休止中）

伊能忠敬研究会「資料室」…現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料。（担当・坂本幹事）

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

「伊能忠敬図書館」…忠敬関係の文献、画像資料。（担当・前田）

<http://www.tt.rim.or.jp/~koko>

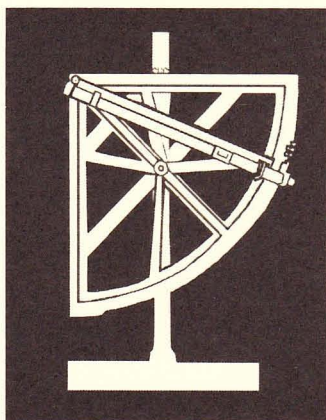
編集後記

◇先日、早稲田から牛込のあたりを散策し、浄輪寺という寺にある関孝和の墓に参った。関孝和といえば、いわずと知れた和算の大家。ライブニッツより前に微積分を発見していたとか、その天才ぶりは有名である。◇たしか昨年は三百年忌だったはず、と墓の説明板を読むと、何と関孝和は「自由亭」と称していたと書いてある。◇江戸時代における「自由」はおそらく「思うがまま、勝手気まま」というほどの意味であろうが、算木を前に数学的思索にふける「算聖」の姿と「自由亭」という雅号との組み合わせは何とも意外であった。◇雅号は自分でつけるものだから、その人の趣味や志向をよく表していると思われる。その点、忠敬先生の雅号「楽天楼」も、先生の人物像を考える上で、大きなヒントになるのではないだろうか。忠敬先生は修身の教科書で大いに顕彰されたが、それと同時にかなり変形させられてもいるだろう。明治以降、作りあげられた虚像を壊し、忠敬先生の真の人間像を明らかにしたいものだと思う。（M）

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.56 2009



TOPICS I

Historic Spots about Inoh Tadataka (6)	Noda Shigeo	1
Tadataka's Lined Paper and Printingblock	Editorial Department	2
Exhibition of "The Large-Scale Inoh Maps" in Fukagawa	Editorial Department	4
"The Coast Map of Old Usuki" was Confirmed as the Inoh Map	Editorial Department	7
"Chukei-Sai" and "Day of Mesurement" of this Year	Editorial Department	8

TOPICS II

Place Names and Landscapes in " <i>Inoh Daizu Soran</i> " (10)	Hoshino Yoshihisa	9
Inscription of the Monument in Bandokorohana	Noda Shigeo	19
Solar Eclipse and Inoh Tadataka	Editorial Department	36
FROM VISITORS' REGESTERS	Inoh Yoko	20

ARTICLES

Learn to Inoh Tadataka	Sakuma Tatsuo	22
Study of Inoh Tadataka (6)	Ishiya Haruka	28
Kashiwagi Family Documents (2)	Kashiwagi Takao	37
Personal Connections of "Wasan" (5)	Ando Yukiko	46
The First Monument about Inoh Survey in Toni	Sakuma Tatsuo	54
Otani Ryokichi and " <i>Inoh Tadataka</i> "	Hashimoto Mampei	60

BRANCH REPORT

Report of Visit in Nagoya Castle Museum	Baba Ryohei	64
-----------------------------------------	-------------	----

MEETING ROOM

Regular Meeting and Member Information	Editorial Department	69
Letters from Members Daily Topics and Informations	Editorial Department	70

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY